

四月
十五日

田樂舞

宇都宮の

祭りと能



宇都宮市教育委員会

表 紙

宇都宮大明神祭礼図(部分)

〈市指定有形文化財〉

一大通り5-2-10 高橋氏所有一

文化財シリーズ第7号

宇都宮の 祭り 芸能

昭和59年3月

宇都宮市教育委員会

序

文

わたしたちの郷土、宇都宮市は、古い歴史と豊かな自然、そこにはぐくまれた数多くの文化遺産にめぐまれ、文化の薫るまちとして発展してきました。

これを裏付けるかのように、我々の生活の中には、楽しい村祭りや昔なつかしい芸能がまだまだ数多く残されておりま。

本市の祭りと芸能は、その起源を千年の昔にさかのぼるものもあり、長い歴史の間に、この風土の中で生まれ、先人のたゆまぬ生活の営みとエネルギーによって守り育てられてきたものです。

豊作を祈る春の祭り、悪霊を払い先祖をまつる夏の祭り、豊作を祝い神に感謝する秋の祭り、そして、神とともに芸能を楽しむ冬の祭り。これら四季折々の中で生まれた祭りの行事に触れ、参加することにより、心豊かで幸せな生活を送ってきました。

これを、文化財行政の観点から一冊の本にしたいと願い、課題別一斉調査を実施し、ここに文化財シリーズ第7号「宇都宮の祭りと芸能」として発刊することになりました。

近年の地域社会や生活様式の変化の流れのなかにあつて、祭りと芸能を含めた文化財をめぐる情勢は、必ずしも明るいとは申せない状況にあります。

したがいまして、この冊子が、多くの市民のみなさんの目にとまり、今もわたしたちの暮らしの中に根強く残り、続いている祭りと芸能に対する認識を新たにさせていただき、加えて、我が郷土、宇都宮をより深く理解するための一助となつていただければ幸いに存じます。

終わりに、本冊子の刊行に当たり、誠意をもって調査にあつていただいた文化財調査員の方々、及び調査に御協力くださいました関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和59年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 後藤 一雄

目 次

序 文

まえがき	4
I 市指定無形文化財の芸能	
1 神 楽	5
(1) 二荒山神社の神楽	5
(2) 八坂神社の神楽	7
(3) 瓦谷の神楽	8
2 獅子舞	11
(1) 飯山の獅子舞	11
(2) 関堀の獅子舞	13
(3) 宗円獅子舞	15
3 堀米の田楽舞	18
4 宇都宮蔦木遣り	21
5 篠井の金掘唄	24
4 石那田の天王様	33
5 徳次郎の夏祭り	36
6 天 祭	38
(1) 瓦谷町下の天祭	38
(2) 篠井町上の天祭	40
7 菊水祭	41
8 鎮守様の秋祭り	43
(1) 川俣町の秋祭り	43
(2) 横山町の秋祭り	44
9 梵天祭り	45
(1) 平出町の梵天	45
(2) 鶴田町の梵天	47
(3) 下町の梵天	48
10 野高谷の大盛飯	49
II 市内の主な祭り	
1 冬渡祭・春渡祭	25
2 茅の輪くぐり	27
3 大杉様の祭り	29
(1) 下砥上町の大杉様	29
(2) 中島町の大杉様	30
III 参 考 資 料	
1 宇都宮市囃子保存団体一覧	51
2 宇都宮市神社一覧	52
あ と が き	58

ま え が き

本冊子は、昭和56・57年度に宇都宮市教育委員会が、市文化財保護審議委員会の答申を受け、市文化財調査員活動の一環として実施した「祭りと芸能（課題別文化財一斉調査）」の結果をもとにしてまとめたものです。

調査は、昭和56年4月から昭和57年11月までとし、市内全域について実施しました。

その結果、79件が報告されましたが、本冊子ではこれに加えて、既に書籍、文献等に掲載されているものを精査検討し、報告のなかったものも収録しました。

本冊子の編集は、市教育委員会社会教育課の職員があたりました。編集にあたっては、祭りは供物、奉楽により、神霊を慰めるなどの神事を伴うものを掲載し、新しくおこった祭りは除外しました。

また、芸能は、市指定無形文化財を全て芸能ごとに分類、収録し、お囃子は巻末に参考資料として団体名等を一覧表に記しました。

なお、この「宇都宮の祭りと芸能」は、次の組織で調査を行いました。特に、高橋幸一、中里一二、板橋弘道、手塚一男、入江義照、大橋武雄氏の協力を得ました。

●宇都宮市文化財保護審議委員会委員

野 中 退 蔵 (委員長)	雨 宮 義 人 (副委員長)	岩 崎 良 能 (委員)
森 谷 憲 (委員)	富 祐 次 (委員)	谷 田 部 康 幸 (委員)
塙 静 夫 (委員)	阿 久 津 浩 (委員)	小 堀 時 蔵 (委員)
戸 田 博 亘 (委員)		

●宇都宮市文化財調査員

黒 川 孝 三 (一条)	塚 田 宗 雄 (陽 北)	加 藤 康 照 (旭)
内 藤 二 郎 (陽 南)	石 川 秀 男 (陽 西)	釜 井 宗 一 (星が丘)
松 本 文 一 郎 (陽 東)	平 塚 良 雄 (泉が丘)	衆 川 弘 明 (宮の原)
菊 池 正 仁 (平 石)	田 中 親 明 (清 原)	増 渕 藤 四 郎 (横 川)
板 寄 悦 男 (瑞穂野)	小 林 哲 夫 (豊 郷)	半 田 勝 (国 本)
高 山 伝 治 (城 山)	福 田 操 (富 屋)	阿 久 津 義 正 (篠 井)
松 本 笑 悦 (姿 川)	小 島 豪 市 郎 (雀 宮)	注()は担当地区

●宇都宮市教育委員会社会教育課職員

加 藤 悦 男 (社会教育課長)	安 達 光 政 (文化振興係長)	定 岡 明 義 (文化振興係)
木 村 光 男 (文化振興係)	手 塚 英 男 (文化振興係)	梁 木 誠 (文化振興係)

I 市指定無形文化財の芸能

1. 神楽

本市に伝承されている神楽は、岩戸神楽とか太々神楽と呼ばれている神楽である。

かつては、かなりの神社で神楽の奉納が行われていたようであるが、現在神楽殿を所有する神社も二荒山神社（馬場通り1丁目）・八坂神社（今泉4丁目）・琴平神社（清住町）・平出神社（平出町）・宝国神社（宝木町）・稲荷神社（兵庫塚町）・砥上神社（砥上町）・星宮神社（西川田町）・星宮神社（上欠町）・戸室神社（大谷町）等と数少なくなっている。この中でも神社が鎮座している土地に個有の神楽を伝承しているのは、二荒山神社・八坂神社及び拝殿で神楽が奉納される平野神社（瓦谷町）だけであり、なお他の神社の神楽奉納は、二荒山神社をはじめとする他の神社に依頼して上演されている。

なお、3か所の神楽とも保存会が結成されており、宇都宮市では3団体の神楽を市の無形文化財に指定して保護保存を図っている。

(1) 二荒山神社の神楽（昭和44年2月13日・指定）

〔所在地：馬場通り1丁目 奉納日：1月28日・5月28日・9月28日〕

① 概要

起源は資料焼失のため定かではないが江戸時代のなか頃といわれている。江戸系統に属する神田流（浅草の若山に始まる）の流れをくみ、神社では宮比流太々神楽と称している。

毎年1月、5月、9月のそれぞれの28日に3回奉納される。なおこの上演奉納は、かつては祈禱講社により行われたが、現在、講は廃止となり新たに神楽保存会が結成されておりこの保存会により上演されている。

娯楽の少なかった時代、神楽は宇都宮の人々にとって楽しみの一つであり、老若男女で境内をうずめつくすほどであった。現在では観る人も少なくなったが伝統的な民俗芸能として守り続けられている。

② 行事経過

午前10時奉納式典が行われ、終了後午前と午後にもわたり、下記のような神楽が上演され午後4時頃終了する。

③ 演目

1. 岩戸廻りの舞、2. 国定めの舞、3. 猿田彦の舞、4. 三神の舞、5. 八幡の舞、6. 四季の舞、7. 玉取りの舞、8. 岩戸の舞、9. 稲荷の舞、10. 鬼女の舞、11. 三狐の舞、12. 恵比須の舞、13. 大黒の舞、14. 熊襲の舞、15. 随神の舞、16. 大蛇の舞、17. 湯立の舞、18. 山の神の舞

④ 衣装等

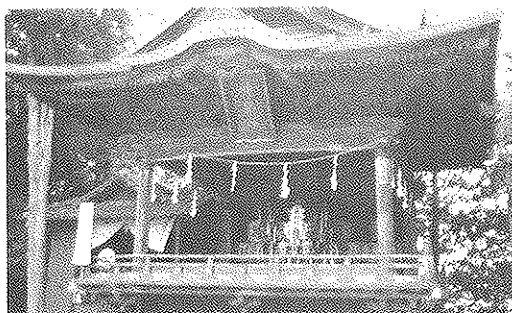
○ 衣装道具

錦大口 4組、狩衣 6着、錦狩衣 2着、伴切 8枚、打掛 2着、羽二重袴 白4

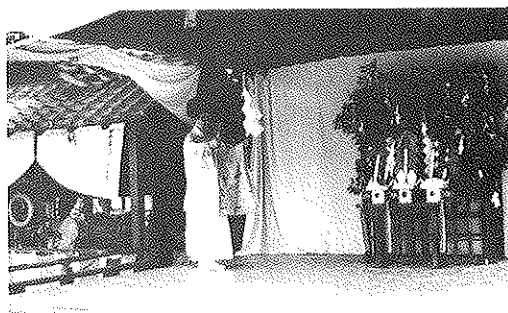
着、赤2着、麻白丁 3着、麻袴 4腰、錦千早 1着など

○ 舞 面

天津神の面他39面（明治4年高田^{つよしゆん}連春の銘あり）



(神楽殿)



(国定め舞)



(二神の舞1)



(二神の舞2)



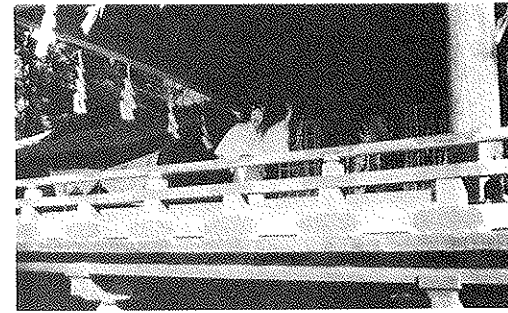
(猿田彦の舞)



(玉取りの舞)



(稲荷の舞)



(鬼女の舞)

(2) 八坂神社の太々神楽（昭和44年2月13日・指定）

〔所在地：今泉町476 奉納日：2月28日・11月23日〕

① 概要

八坂神社に伝わる太々神楽は、もと出雲の古社佐太神社に起こった出雲流神楽の流れをくむと伝えられている。

出雲流太々神楽は、京都に伝わり京都の神楽の家元を経て全国各地に広がった。八坂神社の神楽は、神官の葭田氏が江戸時代（寛政年間）に神明明神へ出向き太々神楽の技能を伝承してきたものといわれている。

明治以後、2月28日（祈禱祭）及び11月23日（新嘗祭）の二度奉納されるようになった。

② 演目と道具

○ 演目

太々神楽の演目として、1 国定め、2 猿田彦、3 二神、4 四季、5 三狐、6 稲荷、7 玉取鐘馗、8 随神、9 弓八幡、10 日本武尊、11 天神鬼女、12 恵比寿、13 大黒、14 湯立、15 八岐大蛇、16 天の岩戸、17 山の神等の舞がある。

○ 各舞の使用面

・二神…天津面、国津面 ・猿田彦…猿田彦面 ・随神…門守面、随神面 ・玉取鐘馗…鐘馗面、鬼面 ・三狐…天狐(父)面、地狐(母)面、子狐(子)面 ・稲荷…稲荷面、ひょっとこ面
子狐・天の岩戸…いさめ面、おかめ面、天手力雄面 ・天神鬼女…天神面、鬼女面、般若面
・恵比寿…事代主命面、事代主下道面、タコ ・八岐大蛇…手名槌面、武内宿禰面、
稲多比売面、ひょっとこ面、素盞鳴命面、おろち面 ・四季…澳津面、春面(寅)、夏面(卯)、
秋面(辰)、冬面(巳) ・山神…青鬼面

○ 楽器

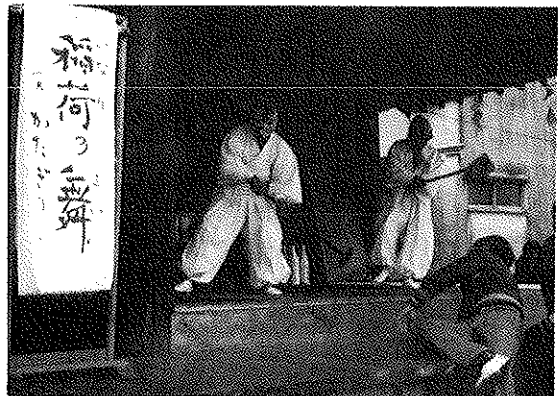
大太鼓、小太鼓、笛

③ 衣装

能狂言の衣装をまねた所が多く、烏帽子、狩衣、小袴等が一般に多く使用される。



(三狐の舞)



(稲荷の舞)

(3) 瓦谷の神楽（昭和44年2月13日・指定）

〔所在地：瓦谷町 奉納場所：平野神社 奉納日：1月5日〕

① 概要

瓦谷の神楽は伝承記録に乏しく、その由来は定かではないが、口伝によると江戸時代（宝暦の頃）京都から伝承したといわれ、平野神社の神主であった篠崎土佐と近くの神主によって神楽組合が作られ、平野神社を始め、二荒山神社、城守稲荷、中里白山神社、下横倉保古神社など各社へ奉納されていたことが、奉納の際使われたと思われる各神社名の版木によって知ることができる。明治初期、組合を解散、衣装、面、諸道具と共に技能は瓦谷に伝承された。明治9年、栃木神道中教院に代表を派遣し、大和流の認可を得て、神楽奉納の際第二番社中教院の認可板を立て演じた。

平野神社への奉納は、旧暦1月28日であったが、昭和40年より1月5日になり今日に至っており、当番は、保存会員のうち2戸ずつ毎年交代で準備を行う。

なお、昭和42年8月、瓦谷町上を挙げて神楽保存会が結成され、後継者も着実に育っている。

② 行事経過

〔8月、12月〕 練習

町内公民館や代表者の高久重雄宅に集まり午後7時頃から10時頃まで各月10日位練習を行う。

〔1月4日〕 奉納の準備

当番宅にて餅をつき、御供えと撒き餅を作り、高久重雄氏が御幣を切る。

〔1月5日〕 奉納

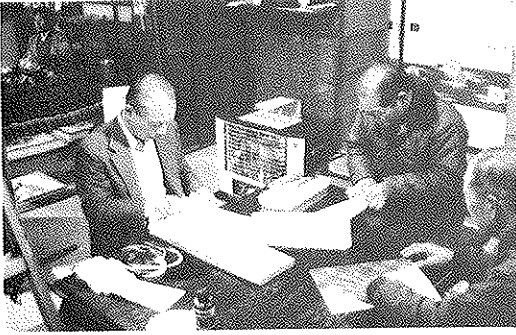
午前中、高久氏が櫛を用意し当番は赤飯を約1斗5升炊く。午後0時30分頃神楽の踊り子全員が集合し神楽殿の飾り付けと衣装、諸道具の搬入を行う。日光おろし吹きさぶ厳寒時で、しかも日が短い季節でもあるので準備が終わり次第、1時頃から舞い始める。毎年必ず奉納される演目としては、国定め、四季、八幡、猿田彦、岩戸開き、稲荷、恵比須の各舞である。

日も西山に傾く午後4時頃、恵比須の舞を最後に、餅、ミカンなどの御供物類を撒き、この奉納行事は終了する。

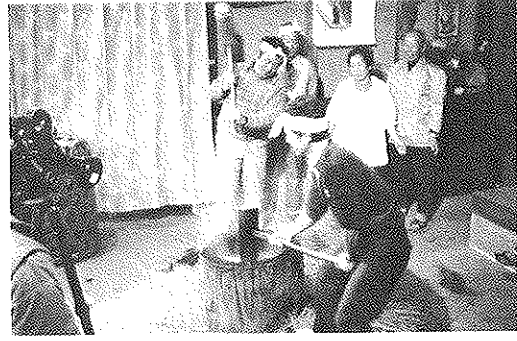
③ 主な舞

題目	舞手名	採物	舞の概要	奏楽（御囃子）種目
国定めの舞	名称不明 ①	大幣	神楽開始時の札拝舞で、素面で大きな装束をもって神楽殿を清める。 通常、神官又は神楽代表者が舞う習わしである。	出端
天狗の舞	サルタヒコノ ミコト ①	剣	道あけの神事を主題とする舞で、大剣をもって天地四方を切り開き、四海を平定鎮魂する。	出端 → 乱拍子

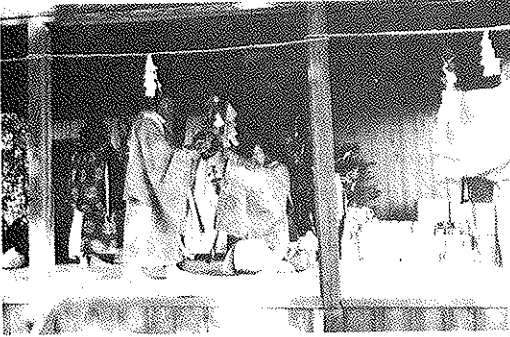
にじん 二神の舞	アマツミコト① クニツミコト①	鈴 チュウケイ (扇)	男女二神が、互いの名を問い、名のりあう 口上のあと、天地が和合して万物が生まれ ることを象徴して舞う。	出端→昇デン
しき 四季の舞	ハル・ナツ・アキ フユノカミ(各1) ゴロウノヒメ①	鈴 幣 東	四神と一姫の口上のあと、姫が下がり、四 神が右手に鈴、左手に色違いの幣東を持っ て、合わせて舞う。	出端→昇デン
はちまん 八幡の舞	ハチマン ① オニ ①	鈴 ダンペイ 弓	「鈴取り鬼」ともいわれる舞で、拾った鈴 を振りながら踊る鬼を、八幡が退治する勇 壮な舞である。	宮神楽→乱拍子→昇デ ン
いなり 稲荷の舞	イナリ ① キツネ ① ドウケ ②	クワ 三 ほう 方 マ ス	農業神としての稲荷大神が、ヒョットコの たてたうねに種をまく様子を舞にしたもの である。後半は、ヒョットコとキツネのだ まし合いの場面である。	出端→昇デン→ヒョッ トコ(道化囃子)→ →篠田の森(つると)
いわたにじん 岩戸二神の舞	サルタヒコ① タヂカラオ① イワトニジン② ウツメ ①	剣 鈴 サカキ 幣 東 チュウケイ	いわゆる天の岩戸開きの舞で、ウツメ等の 神々のあと、手力男命の雄渾な舞が続く。	出端→昇デン →乱拍子→宮神楽 →乱拍子→出端
きじ 鬼女の舞	キジョ ① ショウキ ① アワシマ	剣 鏡 撞 木	憎悪にたぎる鬼女と鐘撞の立回りを中心に した舞で、鬼女は、姫と鬼の2枚の面を使 いわけける。	出端→昇デン→乱拍子
おろち 大蛇の舞	ショウキ ① イナダヒメ① アシナズチ① ドウケ ① オロチ ①	小剣 カメ 2 チュウケイ	1人残った娘と父の別離の様子と、あれく るう大蛇と鐘撞の戦いと、八岐の大蛇退治 後のヒョットコの道化ぶりの3つの構成か らなる舞。	出端→昇デン→乱拍子 →ヒョットコ(道化囃 子)→太鼓のバチで太 鼓を叩く→乱拍子
えびす 恵比寿の舞	エビス ① ドウケ ② (ヒョットコ) タコ ①	鈴 ツリザオ	福の神として恵比寿の鯛つりの舞で、後半 の鯛を争ってヒョットコとタコがすもうを とる様がゆかしいである。	出端→大間昇デン→ヒ ョットコ(道化囃子) →篠田の森(つると)→ 角力囃子→乱拍子



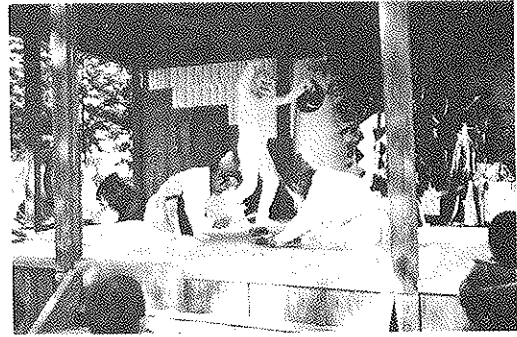
(神札作り)



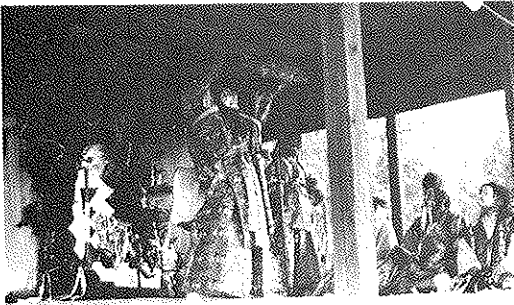
(餅つき)



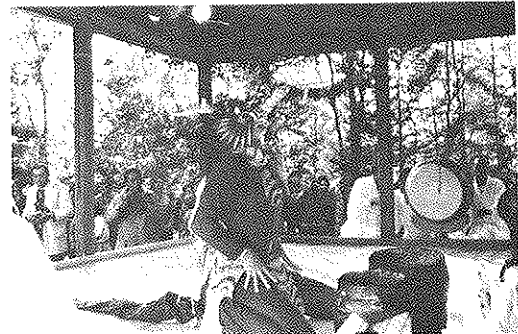
(四季の舞)



(稲荷の舞)



(岩戸の舞)



(大蛇の舞)



(恵比寿の舞)



(雑子方)

2. 獅子舞

獅子舞は、獅子頭をかぶって舞う踊りで、五穀豊稔、悪霊退散、雨乞いなど、庶民の願いを込めて全国各地で奉納されている。

平安時代、宮廷や寺社などの祭礼時に舞われていた獅子舞は、室町時代頃から広く民間に伝わり今日まで続いており、現存する民俗芸能の大多数を占めるに至った。

獅子舞には、舞手が一人で頭に獅子頭をいだいて踊る一人立の獅子舞と獅子の幌ひらに二人の人間が入って舞う二人立ちの獅子舞がある。宇都宮に現存する獅子舞は、飯山の獅子舞（飯山町）宗門獅子舞（新里町乙）、関堀の獅子舞（関堀町）があり、腹に羯鼓かつかと呼ばれる小太鼓をつけ、笛の音に合わせて羯鼓を打ち鳴らしながら雄二匹、雌一匹の3匹で舞う一人立三匹獅子舞である。

舞う場所は、四方に青竹が立てられ、その竹と竹との間に幣束を下げた注連繩しるしづなが張られた土の上であり、各竹の内側に花かご役（花笠）が1人ずつ立つのが通常である。

また、獅子舞を奉納する前に舞う場所を清めるために行われる棒術（木刀と棒の立ち回り）が披露されたり、獅子にオカメ・ヒョットコなどの道化役がからむのが一般的である。

なお、上記した3地区の獅子舞伝承地には保存会が結成されており、いずれの獅子舞も宇都宮市の無形文化財に指定されている。

(1) 飯山の獅子舞（昭和46年11月24日・指定）

〔所在地：飯山町 奉納場所：阿蘇神社 奉納日：8月15、17、18日〕

① 概要

飯山の獅子舞は、天下一関白流と称し、鎮守府將軍藤原利仁にちなむものと伝えられている。

延喜年間（901～922）、藤原利仁は、河内郡北部を荒しまわる山賊の頭目歳宗、歳安兄弟を高座山たかざやまで追討した。里人たちは、利仁を大いに崇め慕ったが、病にかかり飯山の地で永眠してしまった。利仁の死を悲しんだ飯山の人々は、利仁の守神の三尊神獅子の頭を奉納するとともに毎年阿蘇神社に獅子舞を奉納したのが、飯山の獅子舞の起源であると伝えられている。

② 行事経過

〔8月7日〕 ハナフキ

この日を「ハナフキ」と称している。この日は獅子舞の際に使用される道具の確認、修理などを行う。昭和40年頃までは区長の家で一切が行われたが、公民館が建設されてからは、公民館が利用されている。

〔8月8日～12日〕 稽古

夜、区長の家には14～15人が集まり、8時頃より約2時間くらい稽古が行われる。現在は、公民館も利用される。

〔8月15日〕 阿蘇神社に奉納

区長の家に集合し、衣装を付けて、阿蘇神社までの道すじを練り歩く。午後2時頃より、阿蘇神社の境内で神楽舞が奉納され、日暮れ頃終わる。

〔8月17、18日〕 村内を歩く獅子

この日は、世話人の家、村の道辻などで厄病を防ぐための獅子舞が行われるが、昼は、弓取りの舞、夜は本庭の舞を行い、ヒョットコの踊りで幕をとじる。

③ 獅子舞の隊列

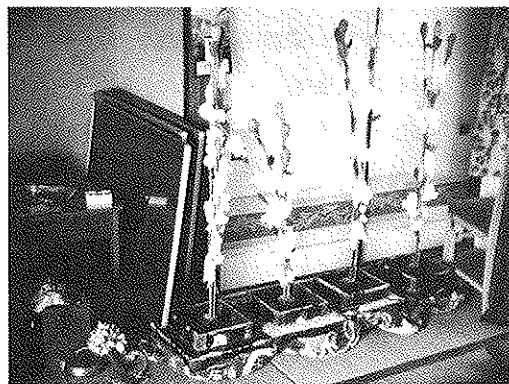
○世話人2人（案内役）——露払い2人（行灯持ち）——ガクモチ1人（旗持）——弓1人——歌2人——笛2人——花笠2人（子供）——獅子3人——花笠2人（子供）

④ 上演される舞

神楽舞、弓くぐりの舞、本庭の舞からなり、この獅子舞の前技としての棒の舞（剣の舞）も行われる。その他の付きものとしては、ヒョットコ踊りも行われ、その道化ぶりを発揮する。神楽舞は「千はやぶる、神の御前を通るときよろず不じょう、きえんざんもの」として阿蘇神社に奉納する舞であり、弓くぐりの舞は、タイコ獅子と雄獅子が弓をくぐりぬけるものであり、さらに、本庭の舞は、別名夜の舞ともいわれ、いも掘りの場面や、雌獅子かくしの場面が見られる。



（獅子頭）



（花笠）



（隊列）



（弓くぐりの舞）

(2) 関堀の獅子舞〔昭和45年1月19日・指定〕

〔所在地：関堀町 奉納場所：観音堂 奉納日：8月14、15、16日〕

① 概要

後冷泉天皇の天喜5年(908)八幡太郎源義家公奥州の賊徒征討の命を受け、当時紫宸殿で執行されていた藤原角輔に獅子舞を命じ、門出を祝福させた。奥州の地の賊徒を平定し、京都に引き上げる途中、その獅子を関堀に残した。これより獅子舞を角輔流と称し、毎年、お盆のときに舞われている。

角輔流獅子舞は古来より関堀町全区民の行事であったため、地区内に居住する総ての成人男子が舞を修得するという固い規約によって引き継がれてきたものであるが、昭和43年4月に全町を挙げて保存会を結成し、保存会会長を中心として後世まで獅子舞の隆盛を期すことになった。なお、獅子頭、衣装、諸道具は、世襲的に町内の塩田宅に保管されている。

② 行事経過

〔7月下旬〕 練習

7月20日頃から約10日間、1日2時間くらい夜練習を行う。

〔8月10日〕 羽根植え

羽根植えと称して、獅子頭や諸道具の修理を行う。

〔8月13日〕 獅子舞の準備

早朝に塩田宅に若衆が集まり、面や衣装等の飾り付けを床の間に行う。そして、御神酒をあげて準備する。観音堂前では、やらいと称して四方竹の御幣を切る。

〔8月14日〕 奉納初日

若衆、世話人が塩田宅へ早朝(7時頃)集まり、棒術と弓の舞を庭で舞う。そのままの衣装で、中宿といわれている郡司宅へ向かう。中宿にても庭にて塩田宅と同じ舞を舞い、一時同家に納める。午後4時頃、観音堂前にて棒術と平庭を舞い、その後、中宿にて御神酒をあげる。

〔8月15日〕 奉納中日

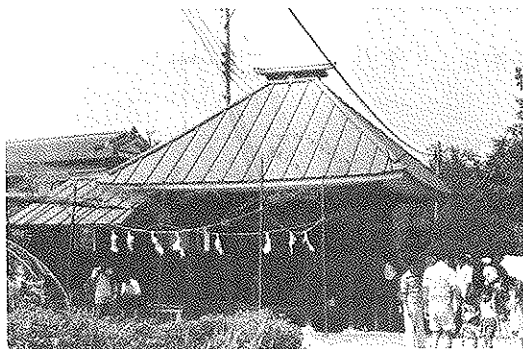
7時から棒術・平庭、3時から棒術、弓の舞、4時から棒術、中宿にて御神酒をあげる。

〔8月16日〕 奉納最終日

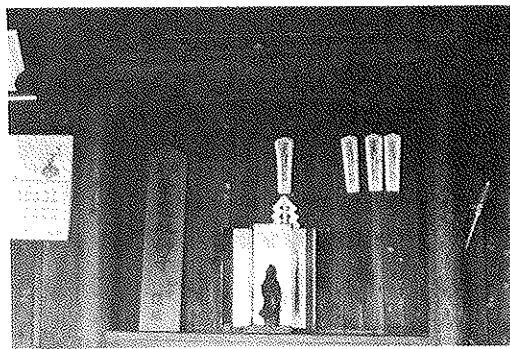
7時から棒術・平庭、3時から棒術・芝さがし、4時から棒術・剣の舞を舞い、舞終了後中宿にて御礼舞として棒術と弓の舞を舞う。その姿で、塩田宅にもどり、同じ舞を舞う。その後、衣装、面、諸道具を床の間に飾る。同家には、世話人と若衆が集まり、御神酒をいただく。その時の料理は若衆が作ることにしている。

③ 衣装等

獅子頭・雄2点、雌1点、衣装2組、道化面2点、花かご(すこう)4点、かしの棒3点、木刀3点、日本刀(直刀3振)、弓^{びょう}一張他がある。



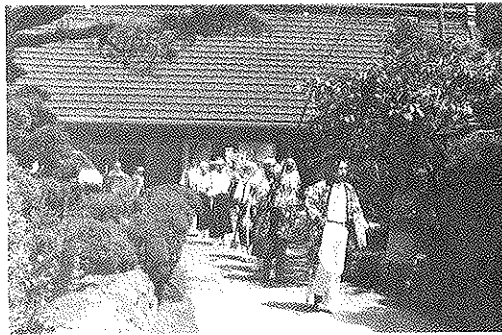
(観音堂外観)



(観音堂内部)



(獅子頭)



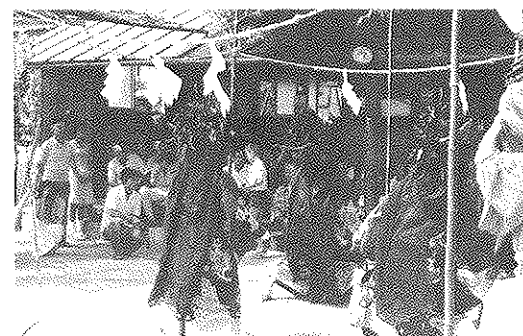
(隊列 1)



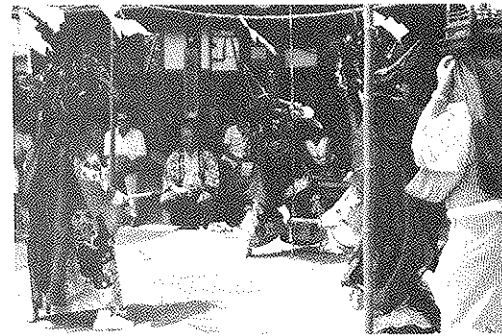
(隊列 2)



(棒術)



(剣の舞 1)



(剣の舞 2)

(3) 宗円獅子舞〔昭和32年1月11日・指定〕

〔所在地：新里町乙 奉納場所：日枝神社 奉納日：8月7、16日 二百十日〕

① 概要

宗円獅子舞は、平安時代の後期に宇都宮初代城主になったといわれる藤原宗円ゆかりのものと伝えられている。宗円は、康平5年（1062）源頼義・義家父子が奥州平定のおり、戦勝祈とうの獅子舞を伴って従軍し氏家勝山の地において、朝敵退散・武運長久を祈って大般若経を修行し獅子舞を行った。宗円の祈とうのかいあってか、奥州の安部貞任・宗任兄弟はたおれ、奥州は平隠になった。

宗円は、奥州平定後も宇都宮に止まって城を築くと、近江坂本の山王（日吉神社）21社中7社を新里（日枝神社）に勧請し、そこに獅子舞を奉納したと伝えられている。

これが新里の宗円獅子舞の起こりといわれ、現在、月おくれの七夕（8月7日）、お盆（8月16日）、二百十日の3回奉納され、平庭、弓くぐり、入れちがい、雌獅子かくしなどの舞が演じられる。

なお、新里町神郷地区の人々（25名）により保存会も結成されており、後継者の育成も順調に進んでいる。

② 行事経過

〔8月上旬〕 練習

夜、7時半頃から公民館に集まり、約2時間の練習をする。

〔8月7日〕 準備と奉納（日枝神社）

日枝神社の境内にある取蔵庫から獅子舞の道具や衣装を取り出し、獅子頭の頭かざりをシャモの羽根でふいたり、弓や棒やバチの房などをつくったりする。そして奉納を行う。

〔8月16日〕 奉納（日枝神社）

獅子宿で舞う準備をし、弓を先頭に行列を作って鳥居へ向かう。鳥居は神の神域への入口なので、そこで簡単な平庭の舞を演じ神への拝礼の舞とする。鳥居がかりという。そして境内につくられた9尺四方の舞台で演じられる。

〔二百十日〕 奉納（日枝神社・薬師堂）

8月16日と同じように奉納された後、行列を組んで薬師堂に向かい、そこでも奉納され、すべての舞が終了する。薬師堂まで行くことを街道下りという。

③ 獅子舞の隊列

○ 弓——花かご（日枝神社の扁額・桜）——雄獅子——雌獅子——太夫獅子
——花かご（牡丹・すすきと月）——笛——簾——棒

④ 演目

○ 棒術

獅子舞の前座的芸能の棒術は、農民自衛の杖術を芸能化したもので、獅子舞の舞台を清める役割を果たす。棒と太刀がわたりあうところが見ものである。

○ 平庭の舞

雌獅子に2匹の雄獅子がからんで踊る舞が中心で、シシアヤシと呼ばれる道化役が登場する。道化はきたない農民衣装と馬鹿面をつけ、手にはサイマラ棒をもって獅子をあやしんだりユーモラスなしぐさをする。この道化役は舞を十分にこなした先輩格が単調な獅子舞に面白味を加えていく。

○ 弓くぐりの舞

獅子が自分で弓をくぐって、村人を代表して我が身を清め、災を除くという舞で、戦の勝利を祈る舞であるともいう。獅子は弓に恐る恐る近づいたのち、弓を各方向からながめ幅や長さを計り、自分の身体の幅と比較し、工夫を重ねる。弓を計る動作や弓くぐりが見もの。出陣の舞ともいう。

○ 入れちがいの舞

雌獅子は休み、雄獅子と太夫獅子たゆうとが交代で4回踊る。4回とも踊りが異なり、悪魔を追い払う。雄獅子と太夫獅子が向きあって入れちがうところがクライマックスになる。

○ 雌獅子かくしの舞

3匹の獅子が花かごのまわりをぐるぐるめぐり、雌獅子が中央に集まっている花かごの中にかくれる。そのことは雄獅子が雌獅子を奪ったことを意味し、太夫獅子は、右へ左へと回ってさがす。雌獅子がいるのを見つけ雄獅子に決闘をいどむが負けてしまう。次に雄獅子が正面を向いているときに、太夫獅子がうしろから入り雌獅子を奪ってしまう。そして決闘となり、今度は雄獅子が負けてしまう。2匹の獅子は決闘は無益だということを知り和解する。



(弓くぐりの舞)



(鳥居がかり)



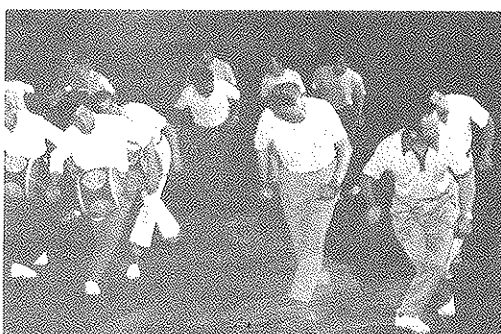
(獅子頭)



(花かご役)



(箆)



(練習)



(棒術)



(奉納の様子)



(雌獅子かくしの舞)



(隊列)

3. 堀米の田楽舞〔昭和53年9月29日・指定〕

〔所在地：関堀町 奉納場所：二荒山神社 祭礼日：5月15日 12月15日 1月15日〕

① 概要

堀米の田楽舞は、宇都宮二荒山神社の祭事である春渡祭（1月15日）、田舞祭（5月15日）^{おたりや}、冬渡祭（12月15日）^{なまいさい}に毎年奉納されている民俗芸能である。

この田楽舞を伝承しているのは、宇都宮市関堀町の堀米地区の農家6軒であり、この6軒により代々世襲制で今日まで継承されてきている。

田楽舞は、豊作を祈る農耕儀礼として平安時代に始まり、鎌倉・室町時代にみせるための芸能に変わり、神社の祭礼行事などに組みこまれ、現在、全国で60数か所近くが伝承されているといわれる。

堀米の田楽舞の由来は、天喜5年（1057）、源頼義・義家が奥州の安部氏追討（後3年の役）の途中、二荒山神社に戦勝を祈願し、乱を平定し凱戦のおり、田楽舞を奉納して祈願成就に報いたのが始まりといわれている。

源頼朝が二荒山神社の社田として7500石を寄進し、その内18石を田楽舞奉納者に賜ったという。また、室町時代までは、20年ごとの社殿の式年造営の際に田楽舞が奉納されたといわれている。

記録によると、長祿2年（1458）の時には、現在のようにササラ舞いのみで2分あまりの短い舞一つだけではなく「すい」「花みつ」「しげやす」「まね与一」「いと桜」「王舞」

「一物」という七曲が演じられており、宇都宮領内に演者が多くいたことがわかる。

なお、現在、田楽舞を伝承している旧豊郷村堀米は江戸時代二荒山神社の神領地であることを考えると、神社への氏子である農民の厚い信仰がうかがわれる。

② 行事経過（田舞祭）

5月15日午前10時から拝殿において式典（小祭）が約30分行われ、同時に拝殿前の石畳の上で田楽舞が奉納される。式典参列者は、神官全員、氏子総代15人、田楽舞演者6人で、拝殿において式典が行われる。

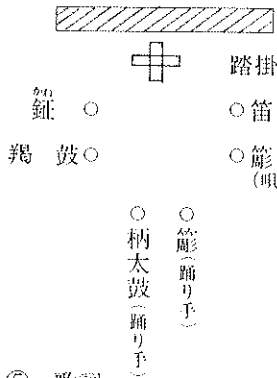
○整列——参進——修祓——合図（太鼓）——宮司拝礼——全員拝礼——献饌——祝詞奉土——玉串奉てん——撤饌——宮司拝礼——合図（太鼓）——退場——田楽舞

③ 衣装と道具

○田楽舞で使用される衣装や小道具の一式は、神社で所有している。そして、その衣装は独特のもので、白足袋、白衣の上に紐で膝と足首をくくりつける裁着袴をはく。上には裾の後の方が前より10センチほど短い半尻の羽織を着る。さらに竹で編んで紫色の紙を張り、周りに赤布を垂らした丸笠をかぶる。

○小道具は、笛・鼈・柄太鼓・鉦・鞆鼓である。

④ 舞のあらまし



田楽舞では、拝殿の前の中央に、竹棒（約 1.5m）の下から約30cmのところを横木（約40cm）を十字字に通した「踏掛」を置き、左の図のように演者6人が並ぶ。

笛とともに歌を唄い出し他の楽器も歌に合わせてはやし出す。箆を持った踊り手が腰をかがめゆっくり「踏掛」に歩みより、片足を掛ける仕草をし、元の位置までさがる。次に柄太鼓を持った踊り手も同じ仕草をする。そして歌詞3節で3回繰り返し舞う。

⑤ 歌詞

宇都宮市三笠山神社

♩ = 100

い --- けの みぎ --- わに つる とか --- め

よ ろ ず よ ま で --- も か ぎ り --- な

3 (き - み の め ぐ --- み - ぞ)

国も榮えて
民も豊かに
治まる御代の
ためしには

池のみぎはに
鶴と亀
よろず代までも
限りなき

下代も経なまし
姫小松
君の恵みぞ
ありがたや



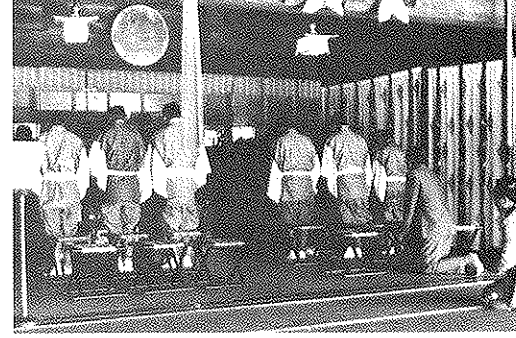
(用具の蔵出し 1)



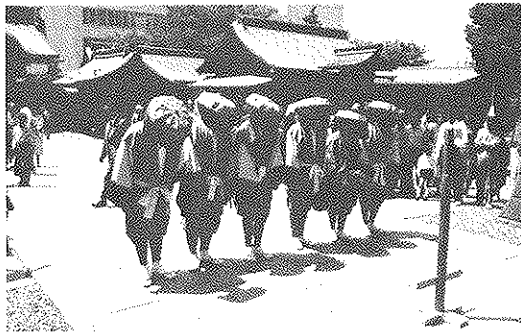
(用具の蔵出し 2)



(衣装つけ)



(神事への参加)



(奉納直前)



(奉納の様子 1)



(奉納の様子 2)



(奉納の様子 3)

4. 宇都宮^{とびきやり}蔦木遣り〔昭和36年10月4日・指定〕

〔所在地：本丸町16の18〕

① 概要

木遣り音頭は、一種の労働歌で、全国各地に普及されているが、長い歴史の間に、その土地の伝統による形式が固定し、独特のものを形成している。

宇都宮の蔦木遣りは、徳川三代將軍家光が、日光東照宮の造営に当たり、全国各地より集めた名工・技工を冬期中の避寒のため、宇都宮などに宿泊させた際に、名工たちの間に盛んにうたわれたものが伝承され、しだいに宇都宮独特の形に固定し、今日に至ったものといわれている。

東照宮完成後、諸大名等の日光参詣が盛んになるにつれ、宇都宮はその宿泊地として繁栄をきわめ、火災の頻度も増加し、その数は江戸に次ぐ有様だったといわれた。このため、明和・安永・天明にかけて、宇都宮にも「いろは」四十八組の町火消しが編成され、蔦職を中心とした火消し人足が常置されるようになった。

一方、耐火建築として土蔵作りが盛んになり、これらの地固め、心棒つき、上棟などの際に蔦職が木遣り音頭をうたった。

宇都宮蔦木遣りは、江戸木遣りに比べ、テンボがやや速く、^{ちゆうう}中間であるが独特の格調高い歌である。明治以後は、次第に伝統はうすれ、特に第二次世界大戦後は急速に衰え、その伝承もむずかしい状況になっていたが、昭和25年3月、梁川新三郎氏（故人）等によって保存会が結成され、木遣り音頭並びに^{まといり}纏振りや^{はしこ}梯子乗り等の伝統的技能が保持されている。

② 活動状況

ア 年間における主な参加行事

⑦ 消防出初め式典、パレード参加、木遣り唄、纏振り、梯子乗り披露

⑧ 二荒山神社「節分式」に協力

年男・年女を池上町から神社まで、木遣りを唄って送る。

⑨ 「ふるさと宮まつり」パレード参加

木遣り唄、纏振り、梯子乗り披露

イ 結婚式など祝儀の席に、依頼されて祝福の意をもつ木遣りをうたったり、蔦組合員や建築関係者の葬儀の時、弔意をあらわした木遣りをうたうこともある。

③ 歌種

歌詞は全部口伝で、宇都宮の木遣りは「梁川家口伝書」によると37種である。覚えるのに15年～20年かかると言われ、歌も最初にうたうもの、午前中のみうたうもの、正午にうたうもの、仕事しまいにうたうもの等にわかれている。

とびきり 木遣り

1. まなづる

宇都宮地方 (梁川新三郎口伝)

♩ = 56

(兄)ヨオ ヨオ ----- エンヤ レ ヨ (側)ヨオ ----- エ-----

2. てこ

♩ = 56

(兄)ヨ イヤ レエ----- てこ --- おせ ----- (側)ヨオ --- ホオ
 ----- エン ヤ --- ア ネ (兄)エ ごくろう-----
 - だ ----- てこ おせ ----- (側)ヨオ --- ホオ ---
 エン ヤ --- ネ (兄)エ たのみま --- す ----- てこ
 おせ ----- (側)ヨオ --- ホオ ----- エンヤ ----- ネ

まなづる

兄「ヨオ ヨオ エンヤレヨ」
 側「ヨオ エ」

てこ

兄「ヨイヤレエ」
 側「ヨオホオ エンヤネ」

てこ おせ」

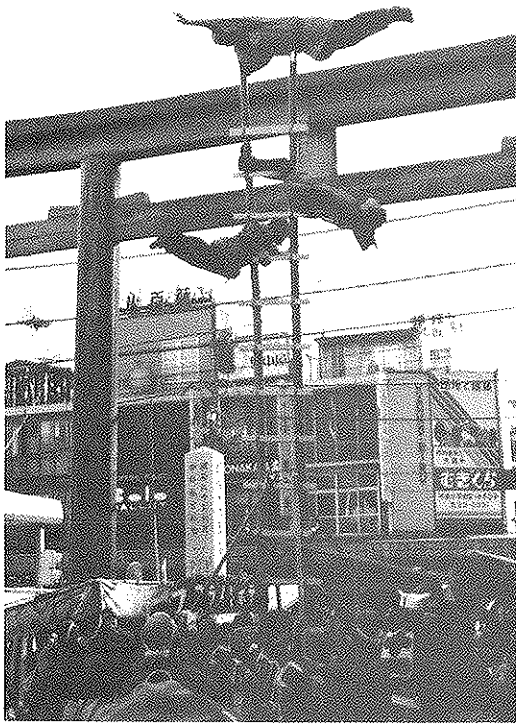
兄「エ ごくろうだ」
 側「ヨオホオ エンヤネ」

てこ おせ」

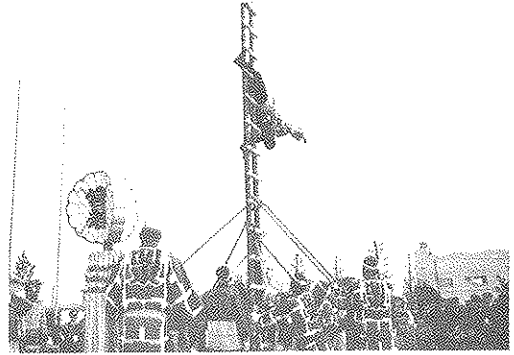
兄「エ たのみます」
 側「ヨオホオ エンヤネ」

てこ おせ」

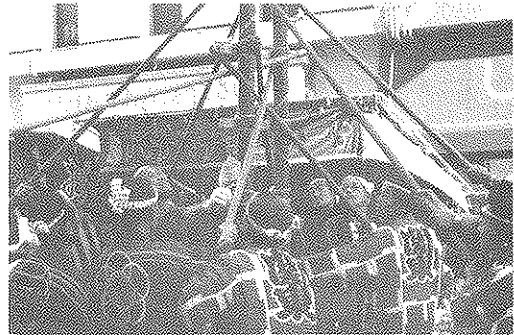
側「ヨオホオ エンヤネ」



(梯子乗り 1)



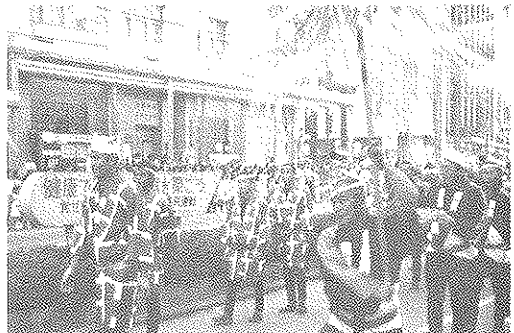
(梯子乗り 2)



(梯子乗り 3)



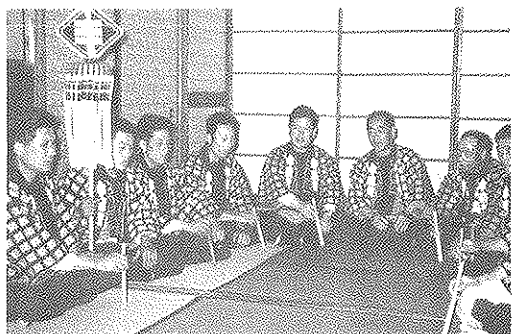
(縄振り)



(宮祭りの行進)



(出初め式での行進)



(練習)

5. 篠井の金掘唄〔昭和38年3月5日・指定〕

〔所在地：篠井町中篠井〕

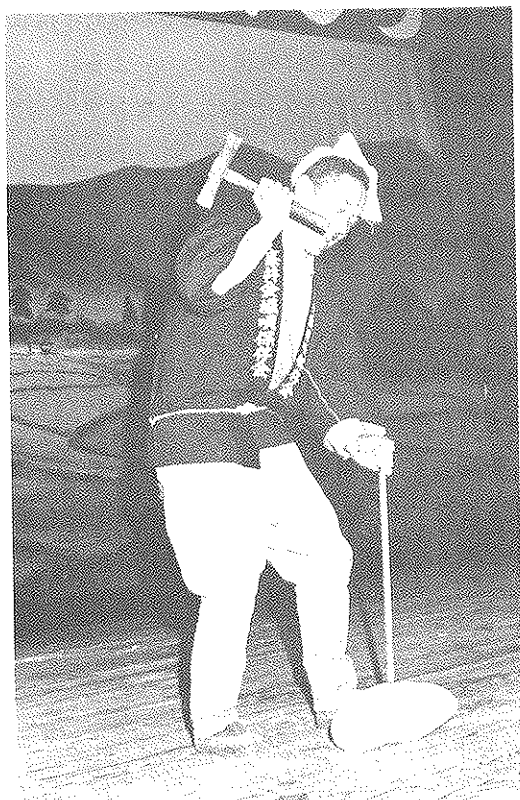
① 概要

篠井の金掘唄は靈元天皇の寛文8年（1668）当時金山奉行であった水戸の佐竹侯が、その御蔵山にしていた篠井金山で、抗夫たちによって歌われたのが始まりであるという。その後明治・大正と時代を経るごとに、詞、節とも幾分変形し、近代化して今日に伝わっている。

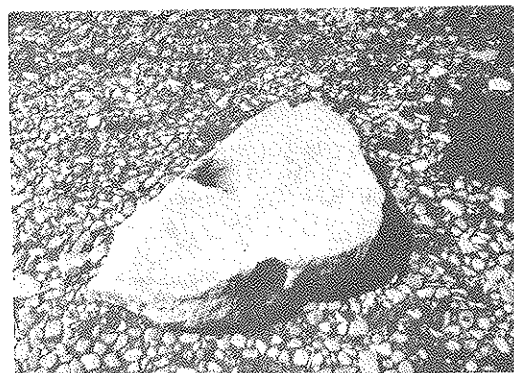
なお、金掘唄は、現在、形を変えて、草刈唄として篠井に伝わっている。

② 歌 詞

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | ハッパかければ 切羽が延びる
延びる切羽が 金となる ハア、チンチン | 5 | 右に鉦持ち 左に手金
ひとつ打つたび 火花散る ハア、チンチン |
| 2 | 曇るガンガラ 宝の山よ
里に黄金が 流れ出る ハア、チンチン | 6 | 灯蓋 ^{あかり} ともして 黄金を掘れば
黄金光で 目がくらむ ハア、チンチン |
| 3 | 抗夫さんなら 来ないでくれ
ひとり娘の 気をそらす ハア、チンチン | 7 | 佐竹奉行は おれらの主よ
恵み厚きで 精が出る ハア、チンチン |
| 4 | ひびく鐘音 ^{かねね} 女房が開けば
黄金あつめて 背負い出す ハア、チンチン | 8 | 夫婦揃うて 黄金を掘れば
いつかわがやに 煙立つ ハア、チンチン |



（金掘唄の演奏）



（金鉦を砕いた石うす）



（鉦石を砕いたノミ）

II 市内の主な祭り

1. 冬渡祭・春渡祭

〔所在地：馬場通り1丁目 祭礼場所：二荒山神社 祭礼日：12月15日・1月15日〕

① 概要

承和5年(838)、二荒山神社の祭神が荒尾崎あらおざきの下の宮（現在の映画館スカラ座裏手）から現在の臼が峰に遷座された。一般に、神社の遷座の儀式は夜中に行われるものであり、二荒山神社も夜中に行われたので、これを「渡り夜」と称し、後にこれがなまって「おたりや」というようになったといわれている。しかも12月15日と1月15日の2回に分けて渡ったものと考えられ、12月15日を冬渡祭、1月15日を春渡祭と書いて、両方とも「おたりや」と称している。

この祭りは、夜中に神輿みこしの渡御わたご、田楽舞奉納、お焚き上げなどが行われるのが特徴で、この日に参拝すると、家内の安全と健康、火災防止にご利益があるというので、宇都宮の夜祭りとして、非常に盛況をみせる祭りである。

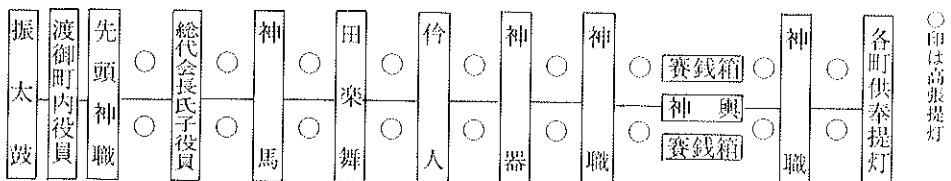
お焚き上げとは、12月15日は氏子たちが古いお札や、だるまなどの縁起物を神社の境内に設けられたお焚き所で燃やしてもらい（新年になって新しい物を買う）、1月15日は新年に飾った松飾り、注連飾りしづなを燃やしてもらう習慣である。火は昼間から燃やされるが、もとは夜になってからが盛んで、夜空を照らす真っ赤な炎は夜祭りと同時に火祭りともいえる。

特に春渡祭の時には、火に手をかざすと、風邪をひかないという。また、今なおマユ玉団子をその火で焼いて食べる光景もみられる。

またこの日は、氏子たちの間に、風呂をたかず、針仕事を休むなど、かつてはいろいろ禁じられていたことがあった。そして、そのような物忌で深く静まりかえった町内を深夜ふれ太鼓の音を響かせて神輿が渡御したのである。

② 行事経過

- 午後4時半、拜殿において、神官、氏子総代、その他の関係者で祭典が行われる。
- 午後5時頃、祭典が終了し、祭神の乗る神輿は社殿から出て、西参道を下って、お旅所（東照宮）の前で渡御の式典（神官の修祓、祝詞奏上、田楽舞の奉納）が行われる。
- 午後5時半頃、行列を整えて神輿が街の中を渡御する。先頭行列は、神輿の渡御を知らせるふれ太鼓、神職、紋付袴の氏子総代、背中に大きな御幣を立てた神馬（神官騎乗の馬）、田楽舞の舞手、ショウ、シチリキを持った楽人、天狗の面をかぶり矛を持った猿田彦、神職、神輿、各町内ごとの名入りの高提灯などが続く。（行列は、次のとおり）

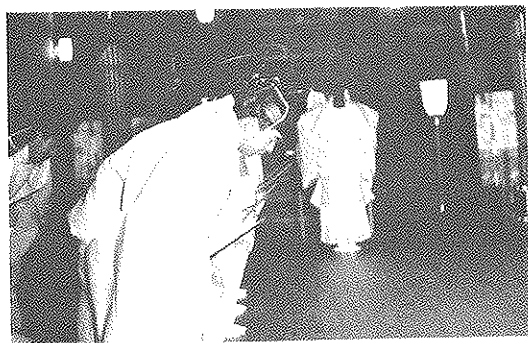




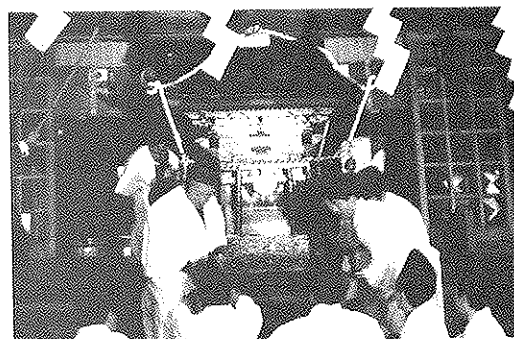
(春渡祭のにぎわい)



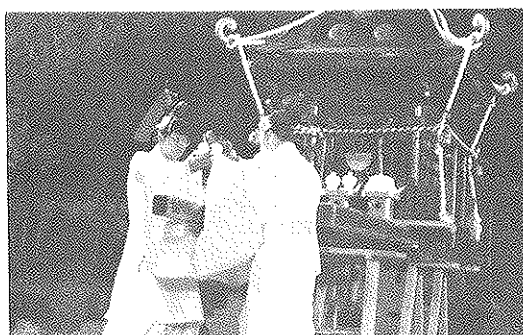
(お焚き上げ)



(本殿での神事)



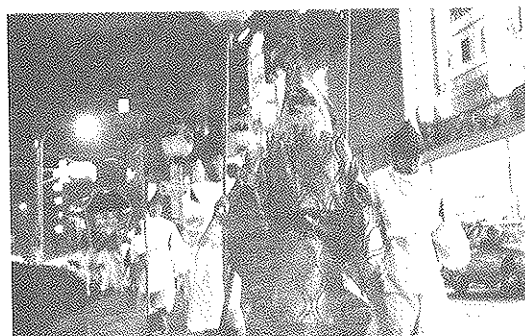
(神輿の運び出し)



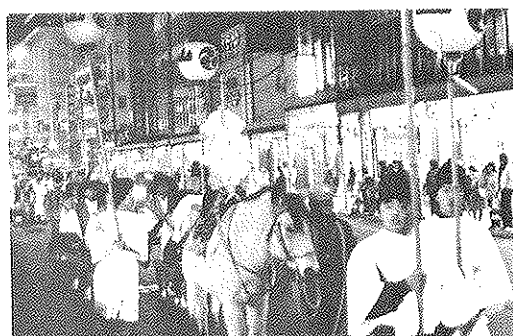
(御旅所の神事)



(田楽舞奉納)



(市街地巡行 1)



(市街地巡行 2)

2. 茅の輪くぐり(大祓式)

[所在地：馬場通り1丁目 祭礼場所：三荒山神社 祭礼日：6月30日]

① 概要

大祓式は、人々の罪と穢れを祓い清めるため、全国の主な神社で行われる行事で、毎年6月30日と12月31日の2回行われる。起源は古く、大宝律令制度(701)以来といわれている。

12月の大祓は、「師走の祓」ともいい、1年間の罪や穢れを祓って新年を迎えるものである。また6月の祓は、「夏越しの祓」ともいわれ、先祖の霊を迎える御霊祭(お盆)に先立って、罪や穢れを祓い清めるためのものであるとともに、夏は厄病が流行しやすい時期なので、これを防ぎ逃れるためだともいわれている。「夏越し」は「和し」に通じ、荒ぶれる神をなごめる意味もあると考えられている。

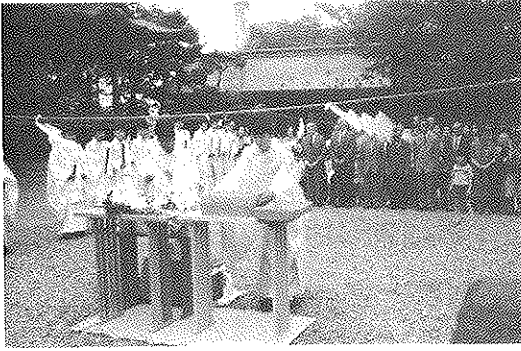
三荒山神社の6月の大祓は「茅の輪くぐり」といい、珍しい神事が行われる。式終了後菅(芒)の茎や葉をたくさん束にしたものを白茅で編んだ縄でもって巻きあげ直径約180cm～200cmの輪を作り、「水無月の夏越しの祓いする人は千年の命延ぶというなり」という歌を唱えながらくぐると、病気、災難から逃れ、長生きできると伝えられている。

この茅の輪のいわれは、昔、武塔神が蘇民将来、巨旦将来の兄弟に宿を求めたところ、貧しい生活をしている弟の蘇民は喜んで泊め、貧しいけれど心からもてなしをしたが、兄の巨旦は生活が豊かなのにもかかわらず泊めることをしなかった。そこで、武塔神は蘇民の腰に茅の輪をつけさせて病から身を守らせ、巨旦はこれをつけなかったので減んだということによる。

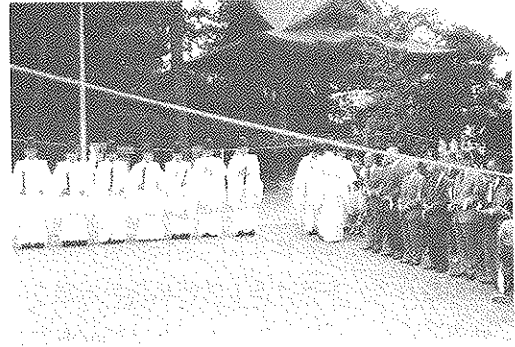
なお、この茅の輪くぐりは、6月30日の午後3時より境内で行われる。

② 行事経過

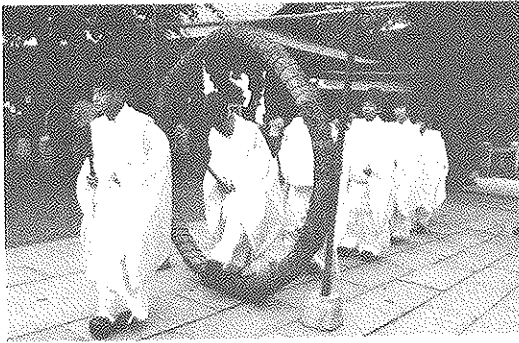
- 午後3時、境内に設けられた式場(4本の青竹を四角形に立て、注連縄を張ったもの)に、神職全員と参列者(希望者はだれでもよい)が整列する。そして全員に「白茅に紙垂」をつけたものが渡される。(12月は切麻)
- 神職が「大祓詞」という祝詞を奏上。
- 全員「白茅」で自分の身体を祓い清める。
- 神職が「白茅」と形代(当日参加できない人は前もって人の形をした紙片をもらって、自分の身体・頭などを祓い、最後に息を3回吹きかけ、神社にとどけるか、参列者に預ける)を集め、祓い清める。形代は後で田川に流す。これを「形代流し」と呼んでいる。
- 式が終わると、神職と参列者は境内を巡り歩きながら、茅の輪を4回くぐって神事が終わる。(総所要時間約40分)



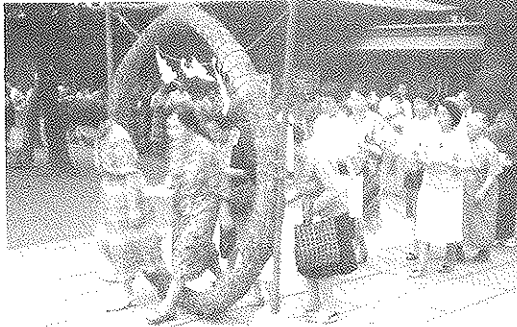
(大祓式の様子1)



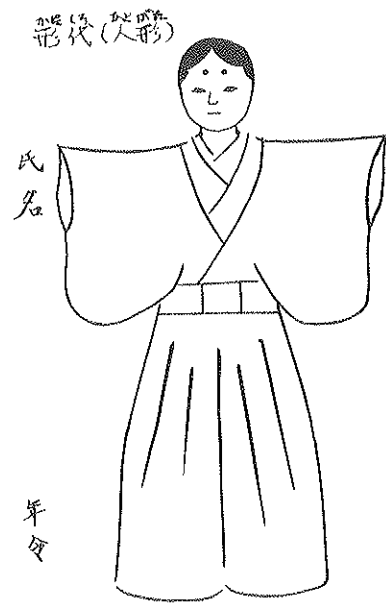
(大祓式の様子2)



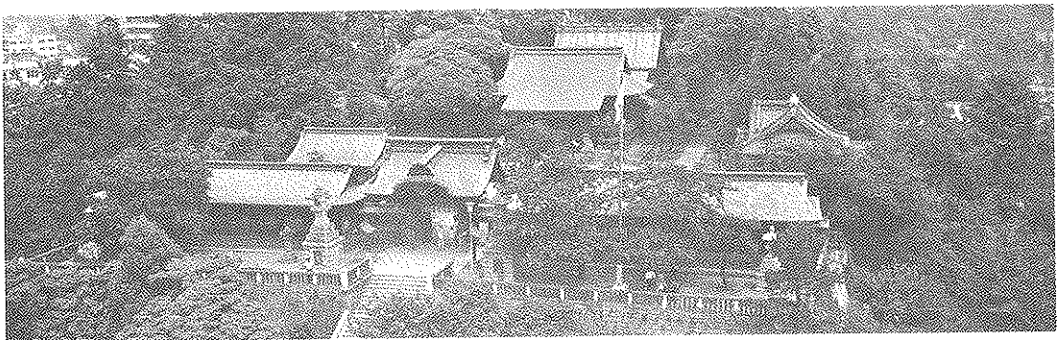
(茅の輪くぐり1)



(茅の輪くぐり2)



(形代)



(二荒山神社)

3. 大杉様の祭り

大杉様の大杉とは、茨城県稲敷郡の大杉神社（大杉大明神）のことで、この神社が桜川村阿波の地に鎮座していることからアンバ様とも呼ばれている。

大杉神社は、本来海の神として広く信仰されていたが、内陸部に入ると水神や悪疫退散の神として信仰を集めるようになった。

本市の場合、現在独立して大杉神社を称する神社は一社もないが、境内神社や神輿として大杉様を勧請している社は多く大杉信仰の根強さを示している。

境内に大杉様を祭る神社としては、稲荷神社（柳田町）・大塚神社（下栗町）・琴平神社（下荒針町）・高靈神社（東木代町）・滝尾神社（江曾島町）・東谷神社（東谷町）・星宮神社（横山町）等10数社あるが、ここでは砥上神社（下砥上町）と中島神社（中島町）の大杉様の祭りを取りあげる。

(1) 下砥上町の大杉様

〔所在地：下砥上町 祭礼場所：砥上神社〕

① 概要

砥上地方に大杉様を勧請したのは天保年間と伝えられているが、祠としては特別なものはなく神輿があるだけであり、この神輿の渡御が旧暦の1、5、9月にあった。

かつては、大杉様の神輿を担ぐのは砥上にもこ入りした人の役割で、天狗と烏天狗に先導され、いわゆる大杉雛子と共に行列を組んで各戸を回った。

天狗は、各家で「阿波大杉大明神、悪魔払ってよいしょ」と唱え、矛の柄で床板を突いて悪魔を払い、各家では養錢と酒肴を供え神輿を拝した。

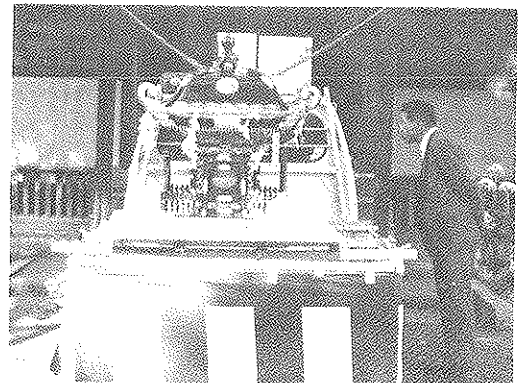
しかし、第二次世界大戦後は、戸数の増加（戦前40戸・戦後240戸）により神輿は自動車に積み、隣組班（24班）の各代表宅を会所とし班員が参拝する形になっている。

② 神輿と衣装等

現在の神輿は明治13年に創設したものであり、天狗（赤装束）・烏天狗（緑装束）の面・衣装は戦後修理あるいは新調したものである。



(神輿渡御)



(神輿)

(2) 中島町の大杉様

〔所在地：中島町 祭礼場所：中島神社 祭礼日：7月15日〕

① 概要

中島神社は、大山祇命おほやまのみことを主祭神とする中島の鎮守であるが、江戸時代後期に大杉信仰を取り込んだと思われ大杉大明神を勧請した神輿みこしがあり、第二次世界大戦前までは盛大に大杉様の祭礼が行われていた。

しかし、戦後、中島町でも大杉様の祭りは絶えてしまっていたが、最近、町をあげての祭りとして復活したものである。

なお、中島町では大杉様の祭りの前日（7月14日）を天王様の祭礼日としており祭りの準備は両方を兼ねて行っている。

② 行事経過

〔7月7日～14日〕 祭りの準備

7日の午前中に町内の老人会の協力を得て、神社境内の清掃が行われ、本世話人（世話人3名の中の責任者）は神官から神札、白幣、注連繩しめなわ等を受けてくる。次に3名の世話人により社殿から出された大杉様及び天王様の神輿の飾り付けが行われる。

飾り付けが終わった神輿に、世話人は御神酒と御灯明を供えて守護し、囃子方はやしがたは囃子を開始し祭り気分を盛りあげる。なお、神輿の守護と囃子は13日まで毎夜続けられる。

12日 世話人はそれぞれの神輿に供え物（お頭付き2尾、米1升・山の物3品・海の物3品・酒1升）を供えるが、酒は本世話人によって供えられる。

13日の昼食後、囃子方は神社に集まり太鼓櫓をトラックの荷台に組み立てる作業をし、8時から11時頃まで囃子を奉納する。

14日、午後1時から7時頃まで天王様の祭りとなる。

〔7月15日〕 祭り当日

午前9時世話人は夫婦で集合し、一服した後、女の方はまかないの準備を始める。世話人は神輿を境内に出し、神輿の前に御供物・御神酒を供え渡御を待つ。本世話人は神札を、他部落との境界道路7か所に立てて回る。これは昔、他部落からの疫病神が入ってこないようにとのことである。

女の人によりまかないの準備が出来た所で、早めに世話人が用意したお赤飯で昼食をとる。

午後1時太鼓の合図で全員集合する。神輿前に整列して世話人の合図で、二拝二拍手をし社務所にもどり、渡御の前に用意された簡単な料理と御神酒をとり、景気をつける。午後2時世話人を始めとして関係者一同、天狗・烏天狗・御神酒持ち・神輿を担当し順に神社を出発する。囃子屋台はその後から続き、決められた順序に従い家々を回り格式のある家や当番（世話人）の家で小休止する。天狗・烏天狗を迎えると家人はうやうやしく頭を下げ、悪魔払いをお願いします。「阿波大杉大明神 悪魔を払って エンヤラヤー」と御幣を大きくふり3回唱え悪魔払いをする。また、悪魔払いをするときは、部屋にあがってする時と玄関です

ます場合がある。次に御神酒持ちと祝いの赤飯持ちが主人にそれらを進めて身をきよめ、神輿を迎える。神輿は悪魔払いの邪魔にならないように後から行き、玄関前に正面を南側に向けてたてる。主人は神輿におひねりを、金一封は世話人に渡す。こうして次の家へと回る。この間、囃子方は道路上で演奏を続けながら神輿を待つ。また、小休止した家や特別に依頼された時などは屋敷内で演奏する。こうして70戸余りを回って終了するのが夕方となる。最後に境内に神輿を置き一同整列し拝礼する。拝礼後、本世話人の合図で「一本はじめ」を行い、無事終了する。

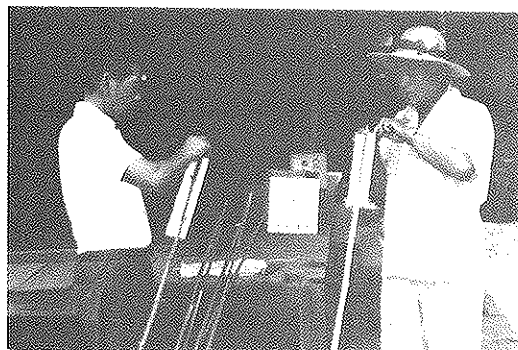
③ 行列と囃子方

ア 神輿の渡御の体列

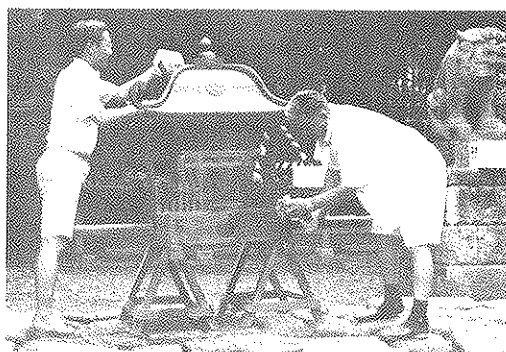
- 先頭 ㊦天狗 烏天狗
- ④御神酒持ち
- ㊧本世話人
- ②神輿
- ③世話人
- ⑦関係者一同
- ⑤囃子屋台

イ 囃子方編成

- 大太鼓 1
- 横笛 1
- 鼓 2
- 小太鼓 2 (締め太鼓)
- 鉦



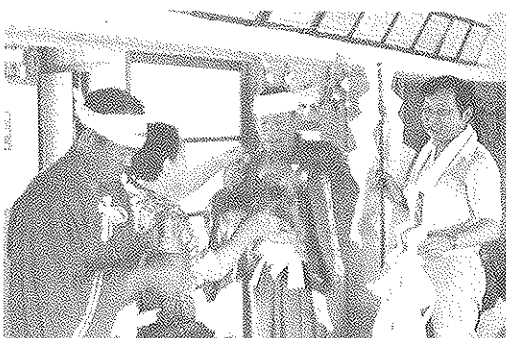
(神札を竹にはさむ)



(神輿の清掃)



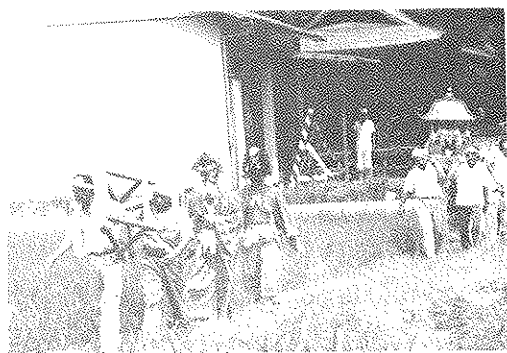
(神輿への参拝)



(天狗の衣装付け)



(神輿渡御 1)



(神輿渡御 2)



(神輿渡御 3)



(神輿渡御 4)



(囃子方)



(悪魔払い)



(天狗の移動)



(渡御前の景気付け)

4. 石那田の天王様

(所在地：石那田町 祭礼場所：八坂神社 祭礼日：7月24日)

① 概要

天王様の天王とは、牛頭天王くずのことで水神として信仰されていた。牛頭天王は素盞鳴命すさのおのみこと(須佐之男尊)であるとされ、疫神を支配する神として信仰を集めるようになった。いつしか、素盞鳴命を祭神とする神社では疫病が起りやすい初夏に御霊を鎮める祭りが行われるようになり、一般にこの夏祭りを天王様と呼ぶようになった。

素盞鳴命を主祭神とする市内の独立している神社は、八坂神社7社(今泉・鎧山・荒針・下荒針・駒生・田野・石那田町)と御霊神社(横山町)・雀宮神社(雀宮町)等であるが、配神としたり境内神社に命を祭っている神社は160数社すべてといえるほどである。

八坂神社の本社は、京都祇園に鎮座する八坂神社であり天王様を同社の夏祭り同様に祇園祭りということがある。

通称天王様と呼ばれる石那田の鎮守である八坂神社の例祭(天王祭)は7月17日午前中に岡坪地区にある八坂神社から、坊村の「御仮屋」への御神体の下遷から始まる。下遷されると「御仮屋」に灯明がともされ、石那田の人々が参拝にくる。一週間が経過した7月24日「御仮屋」に神官、区長、氏子総代、世話人が集まり、神事が行われ、午後10時頃、仲内地区の猿田彦を先頭に6つの山車を伴ってにぎやかに御神体が八坂神社に上遷する。

② 行事経過

〔7月10日〕 崇敬者、世話人参詣寄合

各町会から、氏子総代、世話人及び区長が坊村の「御仮屋」に集まり、山車を出すか、出さないかなどの相談をし、その結果をその日のうちに町会に帰って報告する。原則として神楽、山車とも毎年繰り出しているが、経済的、その他の事情等も考慮して相談が行われる。

〔7月11日〕 警察署へ許可願い

神楽、山車が出されることによって交通規制のお願いに区長、副区長、会計等の3役が警察署に出向く。

〔7月17日〕 神体渡御及び境内、道路普請

この日(午前中)は、岡坪地区の八坂神社より坊村の「御仮屋」へ御神体を移す神事が行われる。また、この日に、境内の清掃、道路普請が行われる。(坊村は御仮屋、岡坪が境内にある池の清掃)

〔7月17日～24日〕 本祭り

各地区の氏子総代、世話人が交代で御神酒、御灯明をあげて守護する。この間氏子が五穀豊穰、家内安全などを願って参拝する。

〔7月23日〕 山車の組立

この日各地区とも「ワカイシサンケイ」によって山車の組立と、飾り付けが行われる。

〔7月24日〕 神体上遷

御仮屋での神事が終了すると区長の「ブツケ」の合図で音がなり猿田彦を先頭に6台の山車を伴って上遷する。

〔7月25日〕 屋台の解体、用具の引き継ぎ

「ワカインサンケイ」を中心に山車が解体される。また、この日のうちに翌年の世話人が決められ、提灯、獅子の道具が引き継がれる。

③ 祭りの体列

ア 上遷渡御の体列

先頭（1番） 仲内の神楽

㊦ 高張り提灯 二つ ㊩ 世話人 ㊪ 天狗 赤の袴（大刀・槍）

㊫ 獅子 2匹 ㊬ 太夫 4人（子ども）金の幣束を持つ

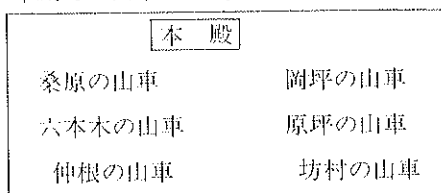
（2番） 神輿 当番の地区で担ぐ（4人）

（3番） 桑原の山車 （6番） 岡坪の山車

（4番） 六本木の山車 （7番） 原坪の山車

（5番） 仲根の山車 （8番） 坊村の山車

イ 本殿での山車の整列順序



ウ 御仮屋での宮座の順序



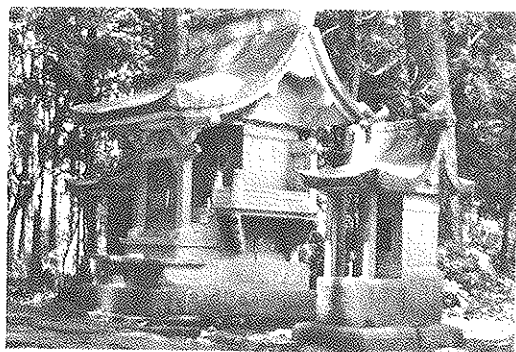
※ 牛頭天王 嘉永2年の記録

宮 司

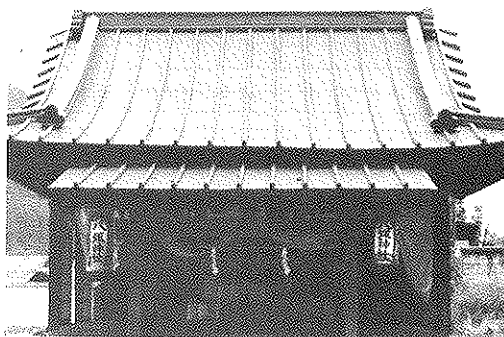
- 1 番 崇者総代（仲内）
- 2 " （桑原）
- 3 " （六本木）
- 4 " （仲根）
- 5 " （岡坪）
- 6 " （原坪）
- 7 " （坊村）

区長、副会長、会計

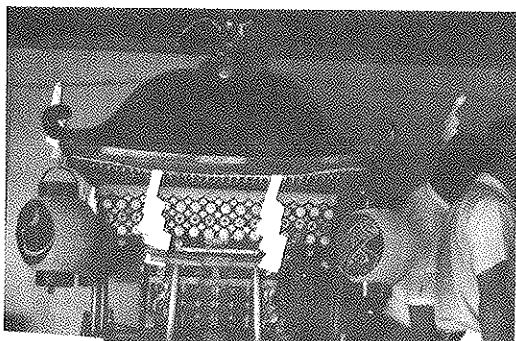
- 1 番 世話人（仲内）
- 2 " （桑原）
- 3 " （六本木）
- 4 " （仲根）
- 5 " （岡坪）
- 6 " （原坪）
- 7 " （坊村）



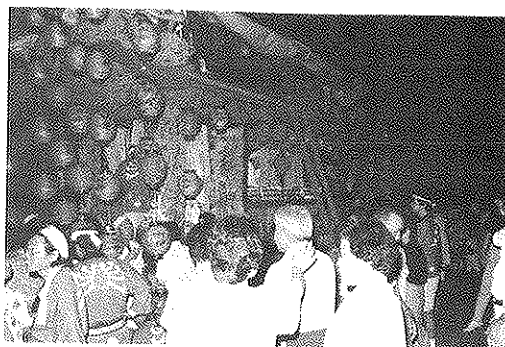
(八坂神社)



(御飯屋)



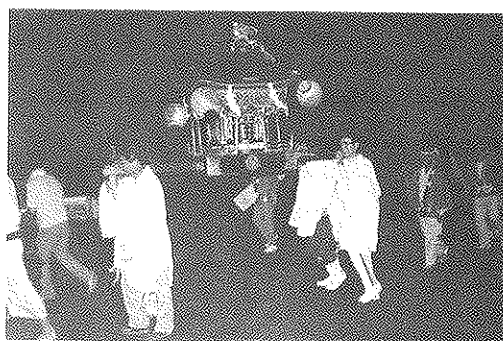
(神輿)



(祭りのにぎわい)



(神輿上遷1)



(神輿上遷2)



(世話人の会合)



(猿田彦の面ほか)

5. 徳次郎の夏祭り

〔所在地：徳次郎町 祭礼場所：智賀都神社 祭礼日：8月1日〕

① 概要

徳次郎町に鎮座する智賀都神社は、奈良時代の宝亀9年6月20日（778）に、日光山明神（二荒山神社祭神）から勧請して千勝森に祭ったのがはじまりとされている。そして神社の入口の鳥居の西側には、樹齢約700年といわれる大ケヤキが2本並んでおり、歴史の古さを物語っている。

また、智賀都神社のある徳次郎の宿は、江戸時代は日光街道沿いで栄え、神社の祭礼日には、地方の彫刻師の手によって派手と華美を競った祭り屋台が組立てられ、上、中、下徳次郎、西根、田中、門前の6町会から出て勢ぞろいする。

② 行事経過

〔5月下旬～6月上旬〕 つけ祭り実施の相談会

徳次郎6町会（上、中、下徳次郎、西根、田中、門前）の屋台6台を繰り出しての祭りを実施するか否かについての相談会で取りきめ、その後町会長、神社氏子総代、神官による合同会議にて決定する。約2か月前に相談会の行われる理由は、つけ祭り実施について次のような準備が必要であるからである。

- 警察への許可願い、神官、氏子の代表が警察へ出向く
- 屋台の補修手入れ
- 提灯のはりかえ
- そろいゆかた、手ぬぐいの注文
- 囃子道具の手入れ

〔7月31日〕 屋台の組立て

- ・午前 屋台飾り、早朝より各町会ごとに、一戸一名出席して屋台蔵に集合し彫物、その他道具の清掃をする。
- ・午後 古老の指示に従い組み立て 夕方までに完成する。

〔7月31日〕 前夜祭（よい祭り）

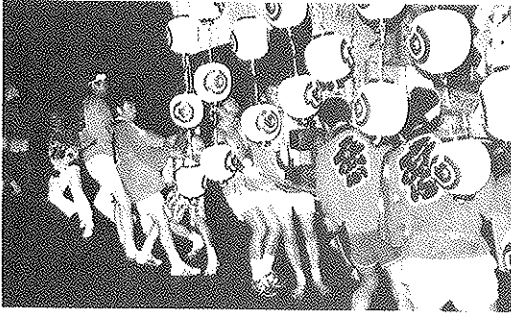
- ・各町会ごとに、日役とともに屋台に提灯をともし、お囃子付きで老若男女を問わず屋台引きに参加する。

〔8月1日〕 本祭り

周囲の約150個の提灯に灯がともされた屋台は、日役とともに動きはじめ、自分の町内を一巡した後、智賀都神社に向かう。以前は夜12時に全屋台が神社に集合し、お囃子の競演を行い、午前2時から夜明けまで、露店が軒を並べる境内で参加人は家族の持ちよったごちそうを取りつつ休養し、早朝、再びお囃子付きで屋台は各町内に帰っていった。しかし、その後の日光街道等の交通事情により、屋台は夜10時に神社境内に集合し、ひとやすみの後、屋台は直ちに各町内に帰り、12時前には終了となる。

〔8月2日〕 屋台の解体及び慰労会

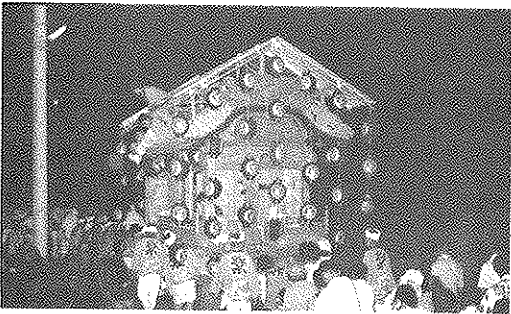
午前中に各一戸1名参加して解体し、屋台蔵に納め、午後は慰労会が行われる。



(屋台巡行1)



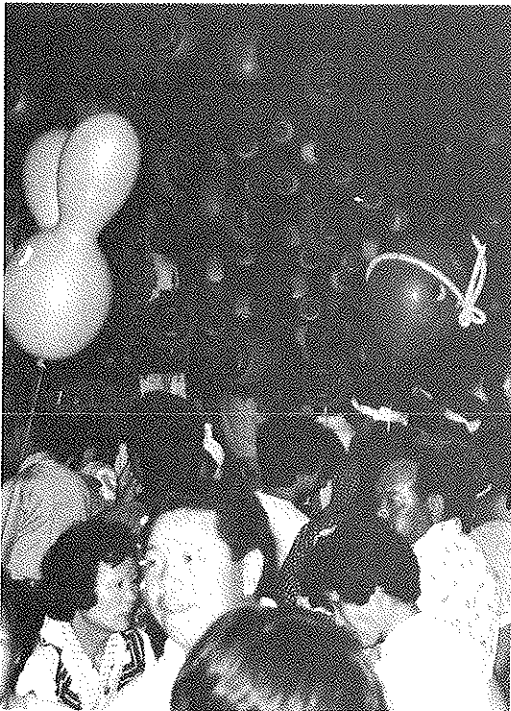
(屋台巡行2)



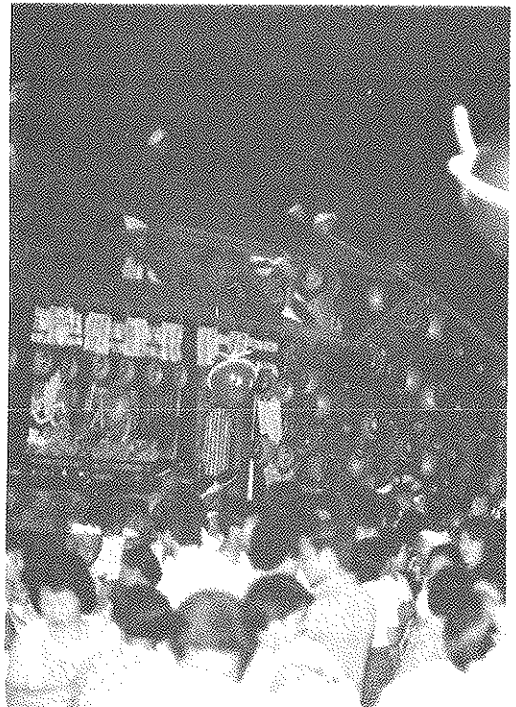
(屋台巡行3)



(祭りのにぎわい1)



(祭りのにぎわい2)



(祭りのにぎわい3)

6. 天 祭

天祭とは、五穀豊穰、村内及び家内安全を祈る村をあげての行事で、宇都宮では田植えの頃や盆や二百十日などに多く行われる行事である。

天祭は、天念仏とも呼ばれているが、両者とも天棚を飾り囃子方を伴う農村の信仰とレクリエーションのまじりあった行事であり、違いは天祭の導師が神官であるのに対して天然仏は僧侶が努めることが多いといわれている。

なお、市内に天棚が現存する場所は、柳田、石井、板戸、氷室、上籠谷、台新田、上横田、御田長島、上桑島、瓦谷、海道、下川俣、新里、大網、篠井、下欠、上欠、飯田町等であるが、現在定期的に天祭行事を実施している所はない。ここでは瓦谷町下と篠井町上の天祭について触れることにする。

(1) 瓦谷町下の天祭

〔所在地：瓦谷町下 祭礼場所：薬師堂 祭礼日：7月15、16、17日〕

① 概 要

瓦谷町下組で行われている天祭は、村をあげての祭りであり、もとは村の男のみが参加したが、近年はこの風習も徐々にくずれつつある。7月20日の百万遍の時に、天祭か風祭り(二百十日)のどちらにするか決める。天祭の場合は世話人4人、風祭りは2人である。世話人は、各戸回り番で行う。オンギョウサマ(行人様)には、信仰心があつく、人望のある者3名が選ばれ、天祭時には天棚上に座し行をする。期間中は、天棚の小屋にてオコモリをし、弁当は各家でおけに入れた赤飯などを交代で持っていき、世話をうける。若衆や世話人16～20人は薬師堂に寝泊りする。オンギョウサマは、祭りに先立って多気山持宝院、二荒山神社などを回り、身を清めてくる。なお、天祭の行の指導者は神主である。最近では、昭和53年に行われた。

② 行事経過

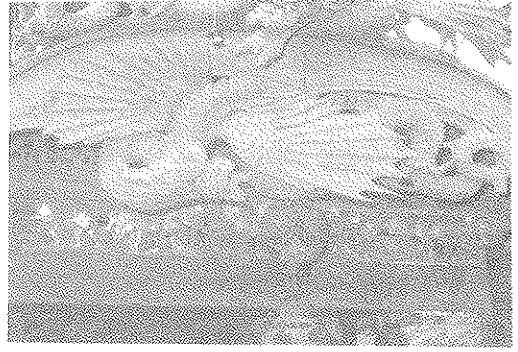
7月7日から1週間練習を行い、14日の朝薬師堂において村をあげて、天保年間に作られたという彫刻のすばらしい天棚を組み立てる。下には囃子方が入り、上にはオンギョウサマが入る。15日の昼から17日の昼までの3日間祭りは続けられる。15日の昼、ブツケと称し行事が始まる。オンギョウサマ3人が、近くを流れる田川に身を沈め祓をし、神事を行う。オンギョウサマは白装束に身をかため天棚上の日天、月天、十二天に灯明、供え物、御神酒を供し礼拝する。囃子方の御来迎の演奏に合わせて、千度踏みが行われる。千度踏みは昼間はゆっくりした歩調で回るが、夜になると御神灯に灯がともされ激しく熱気あふれるものとなる。夜中に行われるのを「オッカケ千度」といって10時頃に行っている。千度踏みは、もとは村の男だけの行事であり、70～80人が天棚の周りをめぐる行道をして、ギョウニンの行を助けた。最終日の17日はブッキリと呼び、正午に終わる。

③ 道 具

笛 1、 大太鼓 1、 小太鼓 2、 鉦 1



(天 棚)



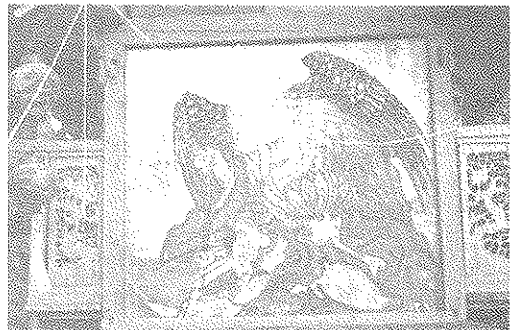
(天棚の彫刻 1)



(天棚の彫刻 2)



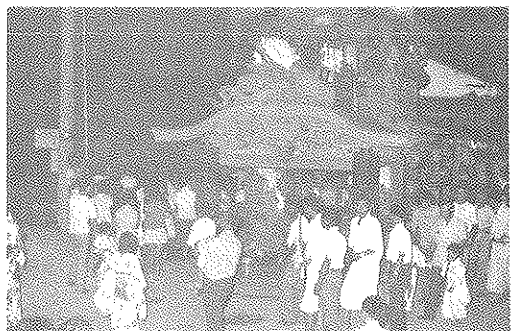
(天棚の彫刻 3)



(天棚の壁画)



(盆 踊 り)



(千度の様子)

(2) 篠井町上の天祭

〔所在地：篠井町上篠井 祭礼場所：高麗神社 祭礼日：8月15、16、17日〕

① 概要

篠井には天祭が上篠井、下篠井、下小池にそれぞれ存在する。これらの天祭は、風雨順調五穀豊稔を祈る信仰的な行事である。

上篠井の高麗神社の天祭は、盆の15、16、17日に行われる。

② 行事経過

祭りの準備は、5～6日前より世話人2名を中心に進められ、世話人が祭りの一切を切り盛りする。

2人のオンギョウサマ（行人様）は、前日から外出せず、おさわ（行湯）で体を清め、白装束に身を固め、前日用意した重ね餅を持って神社に参る。

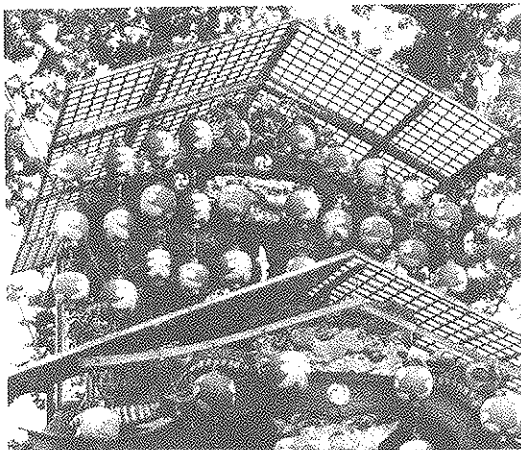
オンギョウサマが御神体を迎える祈りをした後に、オンギョウサマ2人が天棚に立ち、神おろしの唱えを行う。その唱えは「日天、月天、十二天キミョウチョライ、高麗神社キミョウチョライ……」という内容で、近在にある神々から日本各地の神々にいたるまで数々の神の名を唱える。信者はこれを2度復誦する。唱え事の最後に「ヤマヤマタケタケ、ニホンタイショウ、神々の鎮守氏神キミョウチョライ」と言って神おろしの唱えを終える。

この行事の始まる初日のことを「ぶつつけ」と言っている。鉦を合図に千渡が行われ、天棚の周りを梵天を持って回る。第1、第2日は朝、昼、夕、夜の4度、第3日目は朝だけ行う。最後の日を「ぶつきり」と呼んでいる。

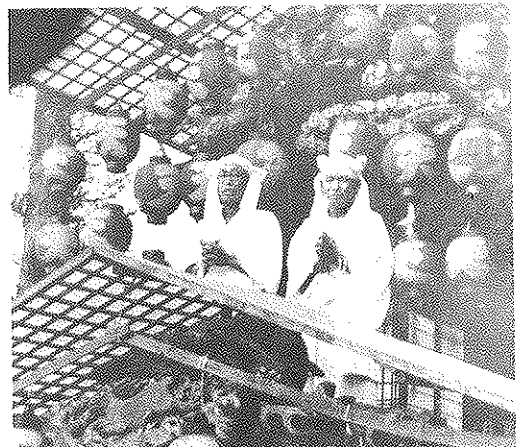
この祭りの期間中（3日3夜）、男は帰宅を許されず、神社で寝起きをする。下小池では金比羅規則として、帰宅したものは罰金をとられた。

③ 道具

太鼓 3、 笛 1、 鉦 1



(天 棚)



(オンギョウサマ)

7. 菊水祭

〔所在地：馬場通り1丁目 祭礼場所：二荒山神社 祭礼日：10月28・29日〕

① 概要

菊水祭は、10月21日に行われる二荒山神社の大祭である秋山祭の付け祭りであり、その起源は延宝元年（1687）頃から続いているといわれている。

祭りは、10月28、29日の2日間で、この日は二荒山神社の祭神である豊城入彦命が風輦（神輿）に乗り、宇都宮の街を渡御する。神社を中心として東を下町、西を上町に分け、両町を一日ずつ回る（前・後は一年交代）。同時に、この2日間の朝・夕計4回社前にて流鏝馬の神事が行われる。この祭りには宇都宮の町内全部が参加し、宇都宮の祭りとしては最盛を極めたものである。現在でも二荒山神社の祭りの中で最もにぎやかなものといわれている。

② 行事経過

- 10月28日 午前8時頃、神前において、杉の葉で神官が身の穢れを祓う儀式である杉の葉神事、そして流鏝馬を行い、その後8時半頃、猿田彦を先頭に、牛車に率かれた風輦の渡御が行われる。午後4時頃、帰還となり流鏝馬が行われる。
- 10月29日は、杉の葉神事によって黄菊と白菊を献納し、これに引き続き前日に回らなかった町を同様に渡御する。

③ 渡御行列の形態

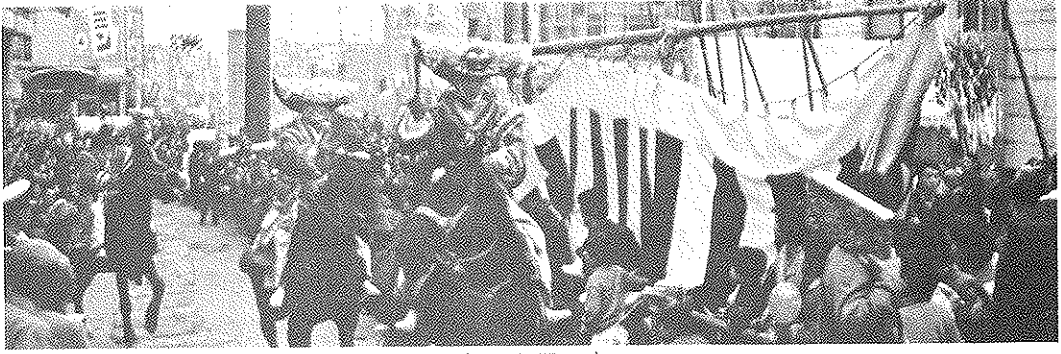
神祇町先頭（5か町）、馬場町の大榎、宮島町の猿田彦（2名）、大工町の鉾一对、日野町の獅子頭面、相生町の三種神器、以下50町内の代表者（袴に菅笠、又は紋付羽織姿が続く）そしてその後、錦旗、弓、差羽、風輦、馬（神職騎乗）、馬車（宮司乗車）、馬（神職乗馬）、流鏝馬武者（四騎）、手槍（約30本）、屋台一台（丸一の囃子）その他各町の山車、屋台も参加することもあり、最盛期には、約60台を数えたという。現在は、簡略化されている。

④ 流鏝馬

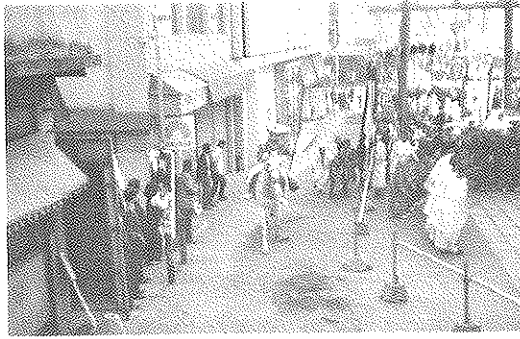
流鏝馬は、28、29日の両日の朝の神事の後と夕方の4～5時頃に、正面石段下の馬場通りで行われる神事である。

流鏝馬は、笠懸、犬追物などと共に鎌倉時代から武士の間に流行した騎射の一つで、馬に乗った武者が馳せながら鏝矢で的を射るものである。的は方板を申にはさんでかつては3か所に立てられたが、助走距離の関係上、上野百貨店西側で一的に行われている。

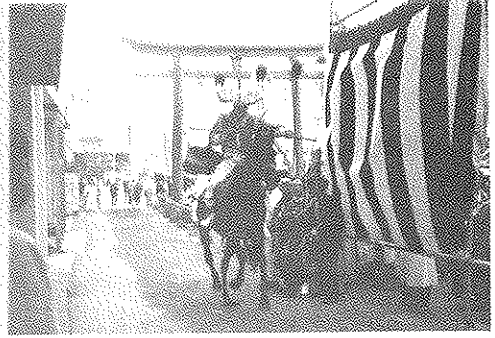
一の馬から四の馬まで4名の武者で行うが、これを担当するのは、元神領の関堀町の人たちがあっている。



(流 鎗 馬 1)



(流 鎗 馬 2)



(流 鎗 馬 3)



(鳳 輦)



(神 輿 渡 御)



(供 奉 者)



(境 内 の 様 子)

8. 鎮守様の秋祭り

宇都宮の新市域と呼ばれる農村部の150社に及ぶ鎮守の例祭はそのほとんどが9月～11月の秋季（※52頁参照）に集中している。

これは、各神社でオクンチあるいはオクニチと呼ばれる旧暦の9月9日（ハツグンチ）、9月19日（ナカグンチ）、9月29日（シマイグンチ・スエグンチ）のいずれかに収穫祭を村をあげて行った名残りであり、この秋祭りを現在もオクンチと呼んでいる地区が多い。

なお、多くの鎮守の秋祭りには、甘酒を造り祝うところから甘酒祭りとも呼ばれることもある。ここでは高麗神社（川俣町）と星の宮神社（横山町）の秋祭りを取りあげてみたい。

(1) 川俣町の秋祭り

〔所在地：川俣町 祭礼場所：高麗神社 祭礼日：11月23日〕

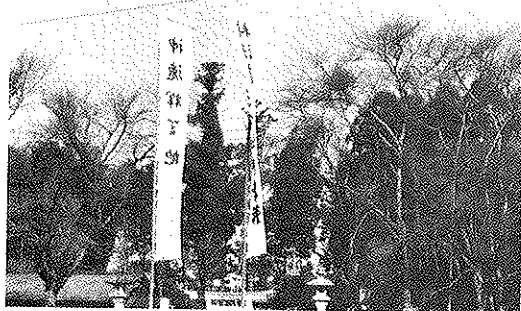
① 概要

羽黒街道と白沢街道に挟まれた川俣町は、市北部の農村地帯である。この町の鎮守である高麗神社の例祭はオクニチ祭りと言われ、昔は10月19日に行われていたが、現在は11月23日の勤労感謝の日となっている。

祭りは町内12組の持ち回り制で行われており、その準備は当番となった組長の家で進められる。昔はその当日がコト日とされ、奉公人やその家族にまで甘酒、赤飯、ナマス、キンピラゴボウなどがふるまわれていた。

② 行事経過

- 祭りの一週間前になると当番の家に集まり、新米を用いて大きなオケに甘酒を作る。
- 祭りの前日の夕方、当番の組で神社の鳥居前に大幟をたてる。また、鳥居に飾る注連縄は新しい藁を用いて当番が作る。さらに当番の家では、祭りに献饌として奉納する五穀、米1升、お頭付きのタイ、大根、人蔘、ゴボウ、ネギ、青ものを準備する。
- 神事は10時頃神主を招いて行い、献饌後、祝詞そして玉串奉てんが氏子総代5人、正副町会長、組長によって行われる。
- 神事が終ると拜殿で、御神酒を全員で飲む。その後、集会所で直会が行われるが、当番は最後の一人が帰るまで残り相手をするになっている。



(高麗神社)



(甘酒配り)

(2) 横山町の秋祭り

〔所在地：横山町上 祭礼場所：星の宮神社 祭礼日：11月23日〕

① 概要

市北部田川中流左岸の横山の鎮守である星の宮神社の例祭は、古くはクニチ祭りであったと思われるが、第二次世界大戦前は新暦の11月3日（明治節）に祭典が行われた。

当時は、豊郷村の村社で大字横山全体で祭礼が取り行われ、大字内の小学校の児童も全員参拝し、その後神社前の田で大字あげて運動会を実施するなど盛大な秋祭りであった。

戦後は、大字横山の上組だけの祭りになると共に、祭典日を11月13日（勤労感謝の日）に変更して現在に至っている。

② 行事経過

- 秋祭りの一か月前頃になると、星の宮神社わきの集会場に横山町上26戸の人々が集まり秋祭りの当番や経費について相談する。

当番は輪番で各戸があたるが、東組（1班・2班）と西組（3班・4班）が年毎に交替に努めるが、秋祭りの当番でない組は十九夜様の当番にあたる。

- 祭りの前々日（11月21日）の午後6時頃、当番宅へ組の人々全員（各戸から1人）が集まり甘酒の仕込みと鏡餅を作ると共に祭礼の打合せをし、午前0時頃散会する。

なお、当番宅の両隣りは女子も手伝いに出る。

- 祭り当日は、朝7時頃当番組のどちらかの班の人々によって神社の鳥居前に大幟（旗）を立て、9時から当番宅に組の人々全員が集まり鳥居に飾る注連縄を作り、それが終ると祭りの諸道具を持って神社に向かい境内や本拝殿の清掃等をし祭りの準備をする。

午後2時、神主の来訪を待って神事が始まり、氏子総代、自治会長、班代表等の玉串奉てんにより神事は終了し、集会所で午後5時頃まで全員で直会をし、直会を閉じると当番組のうち幟を立てなかった班の人々によって幟が降ろされる。

なお、当日の午後は常時当番組の人々によって甘酒が沸かされており、参拝に訪れる人々に振る舞われるほか、当番宅で用意してきた赤飯、子供にはキャラメル等も配られる。



（星の宮神社）



（甘 酒）

9. 梵天祭り

梵天とは、神の依代の一つで御幣の大きなものといわれ、五穀豊穰・商売繁昌・家内安全等の願いをこめ神社に奉納する行事である。

この行事は、修験道系統の信仰から広まったといわれているように、出羽三山の羽黒山神社を本社とする上河内村の羽黒山神社の梵天行事は、宇都宮近隣では特に有名である。

本市内においても、梵天を神社などに奉納する行事が伝えられているが、ここでは、平出神社（平出町）・羽黒神社（鶴田町）及び宇都宮市街地の下町に伝承されている梵天祭りを取りあけることにする。

(i) 平出町の梵天

〔所在地：平出町 奉納場所：雷電神社 祭礼日：7月第4日曜日〕

① 概要

起源は定かではないが、享和2年（1802）光格天皇の臣下が当地方に巡行のとき、激しい雷雨にあい、雷電神社が農業水利と雷除けの加護の靈験あらたかであることを知り、わざわざこのお社に参拝し、道中安全と農民安泰の祈願をされたと言いつたといわれている。また、梵天奉納の始まりも大体この頃と推定されている。

この行事は、夏祭りの行事として宇都宮近辺並びに矢板市に至る近郷農村青年が掛声も勇しく、梵天をにぎやかに運びこみ、農作祈願・商売繁昌・嵐除け・雷除け等の祈願行事として行われてきたものである。

古来から麻とカンピョウで作られた梵天の房は、約20年前頃は、40畳ほどの和紙をさいて作られたが、現在ではビニールテープで作られている。それでも、竹の先端はかなりの重さがあり、時折、先端までの大竹が折れて乱れる姿は壯観である。

現在、梵天は、鶴内・広町、北組・東組、中平出・免の内、の6町内が交代で3年に1度作成し、2本奉納している。

梵天を担ぐ者は、それぞれの町内の若衆（若い人）が主である。

なお、祭りは、旧6月23日に行われていたが、現在7月の第4日曜日に行われ、各家庭では、お赤飯や餅で祝い、ごちそうを用意する。

② 行事経過

〔7月第4日曜日〕 梵天の準備

梵天は、各戸1名が公民館に8時頃集合し、午後3時頃までかかって当番の町内で作られる。

町内の世話人は、材料等を用意する。その他に、御神酒、小餅3俵、御供餅、縄等も用意する。

〔7月第4日曜日〕 祭り当日

梵天を担ぐ若衆は公民館に8時頃集合し、9時頃神社に向かって出発し、10時頃には着くようにする。他の町内も同じように出発する。神社の参道で何度ももむので、奉納は12時頃になる。そして、大木に梵天をゆわえつけて奉納が終了し、餅をまく。

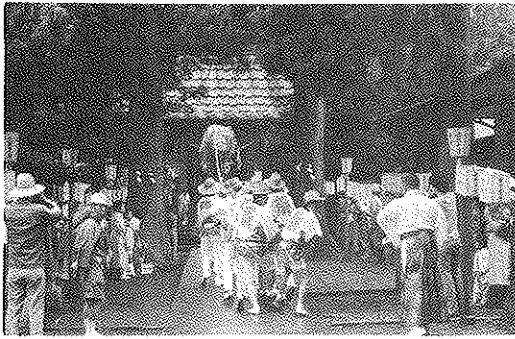
奉納終了後、公民館で慰労会を行う。準備は世話人が行う。



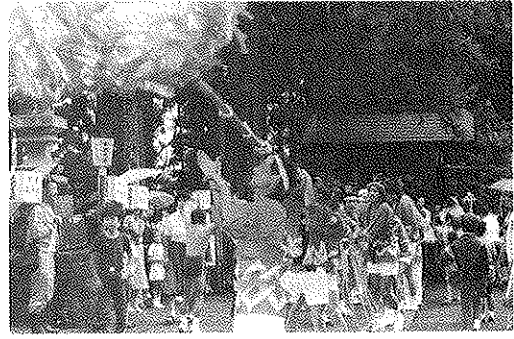
(お 祓 い)



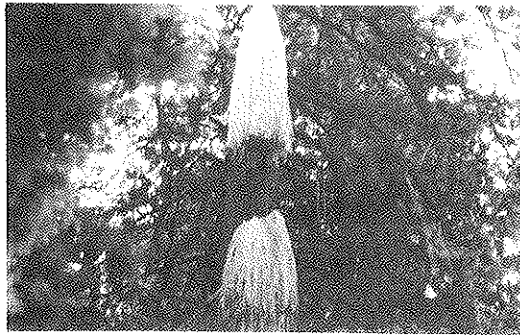
(梵天上げ 1)



(梵天上げ 2)



(梵天上げ 3)



(梵 天)



(餅まきの準備)



(演 芸 1)



(演 芸 2)

(2) 鶴田町の梵天

〔所在地：鶴田町 奉納場所：羽黒神社 祭礼日：11月23日〕

① 概要

出羽三山の羽黒山の名称を付した市内唯一の神社である鶴田町の羽黒神社では、古くから梵天を奉納する祭りが行われていた。

梵天は、約6間（約10m）くらいの長さの根付きの孟宗竹^{いそうちゆう}の先端に約4間（約7m）くらいの真竹をあら縄で結びつけ、そして、その真竹の先に房をつける。かつては房に、かんびょう、大麻、和紙などを用いたが、現在では、赤白のビニールテープを用いている。

長さ十数mの梵天に短い縄を何本もつけ、そろいの袴^{はかま}天、鉢巻き、白足袋を身につけた若者が、その縄を持って担ぐ。道路の角や寄進を受けた家の前などでは梵天を激しく叩きつけながら練り歩く。

かつては鶴田の上・中・下の3坪、また近くの野尻、長坂、さらに農協、青年団、大野市場などが奉納し、にぎわった。しかし、現在では、鶴田の3坪が回り番で3年に1度、すなわち1年に1本だけの奉納ということになっている。

神社の境内では、朝から屋台が並び、ゆずや菓子類等が売られる。また地区内の愛好会による舞踊や歌が披露されたり、砥土町囃子方保存会の人たちによって朝早くから御囃子の太鼓が打たれる。

なお、本殿では、商売繁昌の種子^{たね}銭としてお金を借り、翌年には倍にして返すということも行われている。

② 行事経過

〔11月22日〕 祭りの準備

当番の家に集まり、梵天が作られる。また祭りの準備もなされる。

〔11月23日〕 祭り当日

9時頃当番の宿を出発し、地区内を回り、午後2時頃、羽黒神社本殿正面の鳥居前に到着する。そこで梵天をもみ、一気に坂道を登り本殿前に運ぶ。ここで一休みした後、3度本殿前の広場でもみ、本殿に奉納し行事は終了する。



(梵天上げ)



(境内のにぎわい)

(3) 下町の梵天

〔所在地：押切町 宿郷1丁目 祭礼日：8月の宮まつり〕

① 概要

この行事は、小袋、今泉、押切、宿郷1丁目、宿郷2丁目などの若衆によって江戸時代より続いて行われていたが、現在、この行事が行われているのは、押切、宿郷1丁目のみとなった。また、昭和26～27年以降は田川の水の汚染が甚しくなってきたため、田川には入らず押切橋から本町交差点まで路上をもんで歩くだけになった。

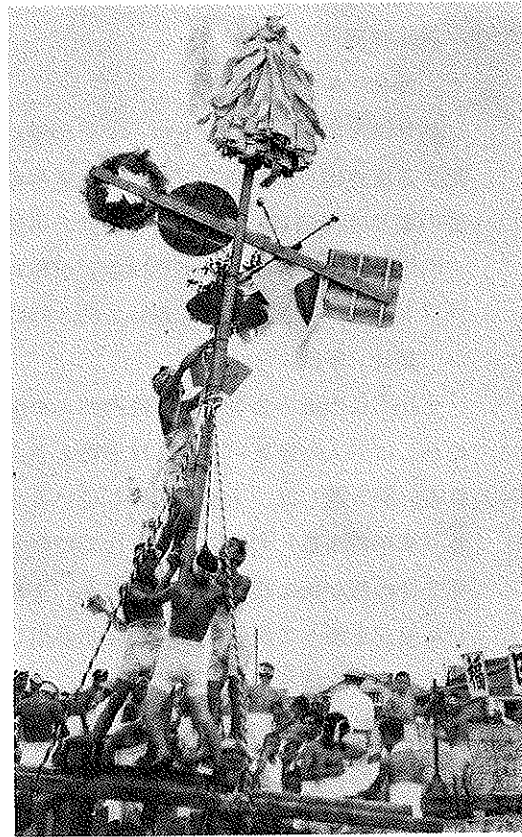
本来この行事は、^{しんがいの}聖霊供養のために旧暦7月7日に行われていた行事であるが、現在は宮祭り行事の一環として行われている。

② 行事経過

毎年旧暦7月7日聖霊供養のため行われる行事で、小袋、今泉、押切、宿郷1丁目、宿郷2丁目の若衆がそれぞれ梵天を作り、宿郷1丁目（現南大通り1丁目）地内の長橋（現洗橋）のたも時から田川に入り梵天をもみながら川をさかのぼり、仙浪の東橋のたもとで路上に上がり、路の両側からバケツで水をあびせかける中を上河原、馬場、池上町、オリオン通りを経て路上をもみながら、それぞれの町内へ帰るといいう行事である。



(梵 天)



(梵天上げ)

10. 野高谷の大盛飯

〔所在地：野高谷町 祭礼場所：三嶋神社 祭礼日：11月28日〕

① 概要

強飯とは、社寺の祭礼・会式、村落における庚申講などのハレ、季節の変化・農耕の節目などにあたる時期に必ずやってくる神仏をもてなすのに御馳走をもってするもので、その神仏を信仰する人間とが共食することにより、家内安全・村内安全・五穀豊穡などを願うものだといわれる。

栃木県では、むかしから、日光輪王寺や生岡神社の強飯式や、さらに素朴な大飯行事などが各地にみられた。しかし、最近、農村の近代化のなかで生活様式や意識の変化により大盛飯の行事は姿を消しつつある。そのようななかで、野高谷町に大盛飯の行事が残り伝えられている。

野高谷町の鎮守は寛徳2年（1045）の創建と伝えられる三嶋神社である。大盛飯は祭神である大山祇神に取穂を感謝し、来年の五穀豊穡を祈願するために始められたといわれ、祭り当番の引き渡しの際に行われる。しかし、本来の引き渡しは、祭礼後の29日であったものが、戦後28日の祭りの前日になったといわれる。野高谷は、上・東・下・北・台・西の六班からなりこれらの六つの班で行事は行われる。

② 行事経過

○ 28日 午前中

祭りの大当番（マツリトウバン）の家に他の五つの班の当番3人ずつが集まり、神社に奉納する注連縄・御供物などを作り、正午頃までに神社に掲げ、祭りの準備をする。各班の当番の家では、引き渡しの際に出すお膳の準備をする。大盛飯のお膳は、ケンチン汁、コンニャクの白和え、それにコモドウフなどが作られる。コモドウフとはふきんでしばった豆腐をワラツトに入れ、荒縄で強く巻いて約3時間ほど煮てつくられ、大盛飯の時だけの料理である。

○ 28日 午後

それぞれの班の当番の家に班内の人々が集まり、宴会が開かれる。ここで飲む酒の量は、むかしは一人一升といわれるほどたくさん飲んだ。飲み終わったころ当番の引き渡しが行われる。引き渡しは、上座に着席している当番（本年の当番）、上当番（昨年の当番）、下当番（来年の当番）の順に、炊きたての新米を入れた底の浅いおけであるハンギリから、およそ5合の飯が椀に盛られて出される。また椀は、本膳の椀を用いる。飯は、ハンギリの中でシャモジを使って餅のようにねばりを出し盛りやすくする。一升飯の場合は、ハンギリのシャモジで飯を棒状にし、それを井桁に組んで、ハシで支えた。そして当番の人が全部食べ終わるまでは引き渡しが終わったことにならないので家に帰れない。そこで、腹を減らすために相撲を取ったり、神社まで走ったりなどして、飯を食べるのに努力したという。



(三島神社)



(飯盛り 1)



(飯盛り 2)



(大盛飯)



(飯盛り 3)



(食事の様子1)



(食事の様子2)

III 参 考 資 料

1 宇都宮市囃子保存団体一覧

番号	名 称	所在地区 (町)	由 来 ・ 沿 革
1	飯田町天祭保存会	城山(飯田町)	飯田町に古くから伝わる天祭行事の際奉納される囃子である。
2	小門吉兵衛流飯田囃子方	城山(飯田町)	安政3年、飯田の御子貝氏が、宇都宮小門町の吉兵衛氏から伝授されたものである。
3	野尻長坂天祭保存会	城山(下荒針町)	下荒針の野尻に伝わる天祭と共に始まったと伝えられる小門吉兵衛流の囃子である。
4	瓦谷町上新宿流お囃子保存会	豊郷(瓦谷町)	天祭行事と共に江戸時代末期から始まったのが、大正年間、鷹嘴氏が新宿流を習得し独特のものとした。
5	徳次郎お囃子保存会	富屋(徳次郎町)	江戸時代前期に智賀都神社の祭りに引き出される屋台と共に誕生したものである。
6	砥上町囃子方保存会	姿川(砥上町)	砥上町に伝わる天祭行事と共に発達してきた囃子である。
7	下川岸お囃子保存会	平石(石井町)	嘉永年間から大杉様及び天祭行事の際、行われてきた囃子で小松流を称する。
8	新清流長島五段囃子保存会	雀宮(御田長島町)	明治初期に全国を放浪していた鶴見清一郎という人から伝授されたと伝えられている
9	東谷お囃子会	雀宮(東谷町)	御田長島町と同様、新清流を称する囃子で、明治期から盛んになった。
10	中島町お囃子保存会	雀宮(中島町)	江戸時代中頃から始まったが、昭和初期に真分佐治・加藤作太郎両氏によって生みだされた流派「佐作流」を称する。
11	砂田町佐作流囃子保存会	横川(砂田町)	明治の中頃誕生したが、昭和初期に佐作流の囃子となる。
12	一里囃子保存会	横川(上横田町)	昭和期になって結成された囃子保存会で、壬生の助谷から五段囃子の技術を伝承したものである。
13	石那田屋台囃子坊村保存会	篠井(石那田町)	八坂神社例祭に引き出される屋台に付随して明治初期に始まった五段囃子で坊村流と称している。
14	石那田屋台囃子原坪保存会	篠井(石那田町)	八坂神社例祭に引き出される屋台囃子で、新囃子と称している。
15	上籠谷お囃子保存会	清原(上籠谷町)	江戸時代末期から盛んになった神田囃子の流れをくむ囃子である。
16	宇都宮駅東お囃子保存会	旧市内(宿郷町)	昭和54年、宇都宮駅東口の開通を記念して結成された囃子保存会で、現在は子供が主力である。

2 宇都宮市神社一覽

No.	神社名	旧社格	所在地	主祭神	例祭	備考
1	秋葉神社	無格社	徳次郎町3187	火産霊命	3月15日	
2	阿蘇神社	村社	飯山町993	磐裂命	10月12・3日	飯山の獅子舞
3	愛宕神社	無格社	氷室町1317	火産霊神	9月19日	
4	"	"	徳次郎町3498	"	1月24日	
5	"	"	" 3383	"	1月24日	
6	生駒神社	"	新里町丁87	保食神	旧7月19日	
7	巖島神社	"	野沢町660	市杵島姫命	旧9月19日	
8	稲荷神社	"	西大寛町2515	稲倉魂命	旧2月初午	
9	"	"	柳田町658	"	10月10日	相撲大会
10	"	"	" 850	"	旧9月29日	
11	"	村社	板戸町1242	"	2月初午日	
12	"	無格社	野高谷町91	"	11月10日	
13	"	村社	砂田町454	稲倉魂大神	11月23日	
14	"	無格社	駒生町1418	稲倉魂命	2月20日	
15	"	村社	兵庫塚町288	宇迦之魂命	旧2月初午日	
16	今宮神社	指定村社	新里町811	大己貴命	10月21日	
17	"	村社	道場宿町879	豊城入彦命	11月19日	
18	岩原神社	"	岩原町233	市杵島姫命	10月9日	
19	宇賀神社	"	桑島町625	稲倉魂命	11月19日	
20	鷓鴣草神社	"	満美穴町438	鷓鴣草葺不合命	11月19日	
21	大塚神社	"	下栗町1099	大日靈貴命	11月23日	
22	大山祇神社	"	上横田町707	大山祇命	11月15日	
23	大石山神社	無格社	飯田町595	道友大神		
24	蒲生神社	県社	塙田町540	蒲生君平之尊	2月5日	
25	熊野神社	無格社	針谷町1217	伊弉諾命	9月28日	
26	"	"	福岡町1163	"	1月15日	
27	鷓峰神社	村社	峰町80	天日鷲命	11月29日	
28	琴平神社	"	曲師町3135	大物主神	3月10日	

No	神社名	旧社格	所在地	主祭神	例祭	備考
29	琴平神社	無格社	清住町2795	大物主命	10月10日	
30	"	村社	板戸町1758	"	旧10月10日	
31	"	"	下荒針町3127	大物主大神	3月10日	
32	"	"	" 3369	"	4月10日	
33	"	無格社	上金井町417	大物主命	10月10日	
34	御霊神社	"	横山町1036	素盞鳴命	9月29日	
35	鷺宮神社	村社	鷺谷町179	豊城入彦命	旧9月19日	子供相撲 神楽
36	猿山神社	"	下栗町216	大日靈貴命	11月23日	
37	塩釜稲荷神社	無格社	一の沢町38	塩土老翁神	4月15日	
38	下栗神社	村社	下栗町1944	大日靈貴命	11月23日	
39	十二社神社	無格社	関堀町145	日本書記所載	12月15日	
40	神明宮	"	大黒町1672	大日靈貴命	5月15日	
41	"	"	宝木町2142	大日靈神	11月最後の 日曜日	
42	"	"	" 1の73	"	11月3日	
43	菅原神社	"	蓬来町1636	菅原道真公	9月25日	
44	"	村社	中河原987	"	2月25日	
45	"	"	猿山町182	菅原道真朝臣霊	11月25日	
46	"	"	台新田町194	菅原道真公	9月25日	
47	雀宮神社	郷社	雀宮町259	素盞鳴命	11月19日	
48	諏訪神社	村社	柳田町539	武御名方命	11月17日	
49	浅間神社	無格社	山本305	木花咲耶姫命	旧6月17日	
50	高籠神社	村社	上戸祭町330	高籠神	11月23日	
51	"	"	戸祭町2705	"	11月9日	
52	"	無格社	築瀬町2083	"	11月29日	
53	"	村社	石井町1110	"		
54	"	"	" 2486	"	"	
55	"	無格社	針谷町255	日本武尊	11月9日	
56	"	村社	羽生田町209	雨之水分大神	旧10月15日	

No.	神社名	旧社格	所在地	主祭神	例祭	備考
57	高 竈 神 社	村 社	下反町370	雨之水分大神	旧10月15日	
58	"	"	茂原町1078	"	11月19日	
59	"	"	竹下町830	高 竈 神	11月20日	
60	"	"	東川田町1122	"	9月19日	
61	"	"	東木代町352	"	11月20日	
62	"	"	東刑部町750	"	11月20日	
63	"	"	西刑部町847	"	11月20日	
64	"	"	西刑部町329	"	11月20日	
65	"	無格社	上桑島町870	高 竈 大 神	11月20日	
66	"	"	下桑島町451	"	11月20日	
67	"	村 社	" 730	"	11月20日	
68	"	"	駒生町1350	"	9月29日	
69	"	"	田下町380	"	旧9月19日	
70	"	無格社	飯田町1111	高 竈 神	10月19日	
71	"	"	新里甲165	"	10月19日	
72	"	村 社	大網町263	"	11月25日	天 祭
73	"	"	関堀町545	"	旧9月29日	
74	"	"	岩曾町882	"	旧9月29日	
75	"	"	長岡町1189	大日靈貴命	11月3日	
76	"	"	下川俣町1477	高 竈 神	10月19日	甘酒大飯ふるまい
77	"	"	川俣町461	"	旧9月29日	川俣町の秋祭り 天王祭
78	"	無格社	岩本町478	"	11月23日	
79	"	村 社	竹林町651	"	10月19日	
80	"	"	篠井町1476	"	11月15日	篠井町上の天祭
81	"	無格社	" 宮腰1948	"	11月15日	
82	"	村 社	石那田町1493	"	1月7日	
83	"	"	下小池町1227	"	11月15日	
84	"	"	鶴田町1261	高 竈 大 神	9月29日	

No.	神社名	旧社格	所在地	主祭神	例祭	備考
85	高尾神社	村社	御田長島町439	高 竈 神	旧10月15日	
86	"	"	下横田町336	"	旧10月19日	
87	滝尾神社	"	西原町滝谷1379	田 心 姫 命	4月17日	
88	"	"	平塚町109	田 心 媛 命	11月20日	
89	館 神 社	無格社	竹下町飛山398	大 己 貴 命	9月19日	
90	滝尾神社	村社	江曾島町316	田 心 姫 命	9月29日	
91	立岩神社	無格社	荒針町462	磐 裂 命	11月10日	
92	多藤神社	村社	上横倉町623	大 己 貴 命	9月15日	獅子舞
93	智賀都神社	"	板戸町1244	大 己 貴 命	10月29日	
94	"	無格社	宝木町1929	"	4月3日	
95	"	郷社	徳次郎町2478	"	2月18日	徳次郎の夏祭り
96	天 満 宮	無格社	西刑部町 1419	菅原道真朝臣霊	1月25日	
97	栃木県護国神社	県社	陽西町292の2	神 靈	4月28日	
98	鶯子神社	無格社	下平出町1845	天 日 鶯 命	10月17日	
99	東谷神社	"	東谷町817	高 竈 神	11月15日	
100	戸室神社	村社	大谷町1797	鳴 雷 神	10月15日	
101	砥上神社	"	砥上町478	火 具 土 神	4月13日	
102	長良神社	無格社	細谷町590	事 代 主 命	11月3日	
103	"	村社	宝木町1 - 170	"	11月3日	
104	中 嶋 神 社	"	中嶋町814	大 山 祇 命	旧10月15日	
105	鶏 鳥 神 社	無格社	上金井町583	猿 田 彦 命	9月19日	
106	新 渡 神 社	"	上小池町499	日 本 武 尊	11月15日	
107	八 幡 宮	"	埴田5 - 4	菅 田 別 命	9月15日	
108	"	村社	宿郷町1	応 神 天 皇	9月15日	
109	"	"	今泉新町1	菅 田 別 命	10月29日	
110	八 幡 神 社	"	針谷町880	菅 田 別 命	旧8月15日	
111	白 山 神 社	無格社	竹林町455	白 山 比 咩 神	10月19日	
112	八 龍 神 社	"	鶴山町西山450	綿 津 見 命	10月23日	

No.	神社名	旧社格	所在地	主祭神	例祭	備考
113	羽黒神社	無格社	鶴田町1743	倉稲魂命	旧10月7日	鶴田町の梵天
114	日吉神社	村社	古賀志町352	大山祇命	11月3日	
115	"	"	海道町160	"	11月19日	
116	平出神社	"	平出町3848	別電之大神	旧2月23日	太々神楽 平出町の梵天
117	平松神社	"	平松本町689	稲倉魂命	11月23日	
118	平野神社	"	瓦谷町1	今木神	旧9月19日	瓦谷の神楽
119	日枝神社	"	福岡町1333	大山祇神	9月19日	
120	"	"	新里乙340	"	10月9日	宗門獅子舞
121	富士山神社	無格社	今泉町1593	木花咲耶姫命	11月29日	
122	星宮神社	村社	大曾町592	磐裂神	4月18日	
123	"	"	越戸町243・902	磐裂之神	11月15日	
124	"	"	下平出町504	磐裂神	11月19日	
125	"	無格社	氷室町787	"	11月19日	
126	"	村社	" 1662	"	9月19日	
127	"	"	鎚山町128	瓊々杵命	11月13日	
128	"	"	刈沼町410	北土星国常立尊	11月19日	
129	"	"	屋板町774	磐裂命	11月23日	
130	"	"	屋板町1075	"	11月19日	
131	"	無格社	古賀志町711	"	9月9日	
132	"	村社	田野町字星宮	"	9月19日	
133	"	"	野沢町540	磐裂神	旧9月19日	
134	"	"	横山町234	磐裂命	11月23日	
135	"	"	幕田町166	"	4月23日	
136	"	"	上砥上町741	磐析命	11月19日	
137	"	"	下欠町55	岩析神	10月1日	
138	"	"	上欠町706	磐析神	10月15日	
139	"	"	西川田町1393	岩析神	10月19日	
140	矛神社	無格社	飯田町914	八千矛神	9月29日	

No.	神社名	旧社格	所在地	主祭神	例祭	備考
141	宝国神社	村社	宝木町1482	伊邪諾命	11月25日	
142	保古神社	"	下横倉町650	天御中主命	9月19日	
143	御田神社	"	上御田町456	大山祇神	旧10月15日	
144	三嶋神社	"	野高谷町739	"	11月29日	野高谷の大盛飯
145	八坂神社	"	今泉町773	須佐之男尊	7月25日	八坂神社の神楽
146	"	無格社	鎗山町406	素盞鳴命	6月16日	
147	"	村社	下荒針町3285	"	旧6月14日	
148	"	"	下荒針町1994	建速須佐之男命	7月10日	
149	"	無格社	駒生町2870	素盞鳴命	6月14日	
150	"	"	田野町天王原	"	6月10日	
151	"	"	石那田町109	"	7月24日	石那田の天王祭
152	湯殿神社	村社	飯田町1523	大山祇命	5月3日	
153	"	"	東横田町625	"	旧10月15日	
154	"	無格社	駒生町2610	"	旧4月初午	
155	"	"	駒生町1792	"	4月初午	
156	"	村社	上金井町778	"	4月8日	
157	"	"	下金井町429	"	4月8日	
158	雷神社	無格社	埴田5-1-19	大雷神	4月15日	
159	雷電神社	村社	細谷町667	"	4月25日	
160	両宮神社	"	上籠谷町1542-5	伊弉册命	2月17日	寄角力
161	六所神社	"	宝木町2083	伊那諾命	旧9月19日	
162	若松神社	無格社	駒生町3024	匂々之知命	旧9月20日	

栃木県神社誌

—第4節 河内地区概観—より作成

あ と が き

市教育委員会では、市民の皆さんに文化財についての御理解と郷土・宇都宮の認識を深めていただくために、身近な生活の中に題材を求め、「宇都宮の民俗」「宇都宮の民家と屋並」「宇都宮の手仕事」「宇都宮のいしぶみ」「宇都宮の名木」「宇都宮の民話」と発刊を重ねてまいりました。

今回、シリーズ第7号として「宇都宮の祭りと芸能」を関係者の御指導、御協力によりまして、発刊できますことを厚くお礼申し上げます。

本書の祭りと芸能に関しては、既に多くの先生方により調査研究され、その成果が、報告書や書籍として発表されているところであります。

この成果をふまえ、文化財調査員の活動の一環として、改めて地域に残る祭りや芸能を調査し直し、整理し、ここにまとめたわけであります。この編集に当たり、既に報告された数々の研究の内容を参考にさせていただき、報告書の体裁をより意義あるものとすることができました。

どこからともなく響いてくる祭り太鼓の音に子どもころ遊んだ神社の境内やなつかしい人々の顔を思い出す人は多いと思います。しかし、調査を進めて行くに従って、生活様式等社会の変化の影響を直接受けてきた文化財の宿命ともいえる定めに加えて、祭りや芸能ゆえの後継者の確保、行事継続の方策、さらには、交通事情への対応などの、新たな課題を含んでいることが、現実問題として、はっきりしてきました。

この課題を背負いつつ、数多くの祭りや芸能が今も季節、季節に行われていることは心強く感じる次第であります。反面、市内各地域に連綿と続いた伝統的な祭りや芸能が簡略化し、消滅、あるいは、忘れられようとしているものも少なくないことは、誠に残念に思われてなりません。

この冊子が、このような流れへの反省の一助となり、また、まだ埋もれている祭りや芸能の発掘に役立ち、この方面の調査の新たな出発点となれば、編集に携った者として、喜びにたえません。

最後になりましたが、調査・編集に当たっては、可能な限り、事実の把握に努めたつもりではありますが、調査もれや不十分な点、意を尽くせなかったところが多々あることは否めません。今後、さらによりよいものへと努力してゆく所存でありますので、関係各位の御指導を心からお願い申し上げます。

昭和59年3月

編集責任者

宇都宮市教育委員会

社会教育課長 加藤悦男

〈参考文献〉

- 昭和38年 『栃木県神社誌』 栃木県神社庁
昭和39年 『栃木県わらべ歌・民謡集』 栃木県連合教育会
昭和48年 尾島利雄 『栃木県民俗芸能誌』 錦正社
昭和49年 『篠井の民俗』 宇都宮市郷土研究会
昭和50年 倉林正次 『祭りの構造』 日本放送出版協会
昭和51年 『文化財講座 日本の無形文化財 2 芸能』 第一法規
昭和51年 今野圓輔 『季節のまつり』 河出書房新社
昭和53年 村上重良 『日本宗教事典』 講談社
昭和54年 尾島利雄・山中清次 『栃木県の年中行事』 第一法規出版株式会社
昭和54年 倉林正次 『日本の祭り・心と形』 大日本印刷株式会社
昭和54年 『心のふるさとをもとめて日本発見 6 祭り』 暁教育図書
昭和55年 尾島利雄監修・下野民俗研究会編 『栃木の祭りと芸能』 栃の葉書房
昭和55年 三省堂編集所編 『日本の行事祭り事典』 三省堂
昭和56年 仲井幸二郎・西角井正大・三隅治雄編 『民俗芸能辞典』 東京堂出版
昭和58年 尾島利雄編 『民間信仰の諸相——栃木の民俗を中心として——』 錦正社
昭和58年 『図説 民俗探訪事典』 山川出版社
昭和59年 『うつのみやの歴史』 宇都宮市

昭和59年3月15日発行

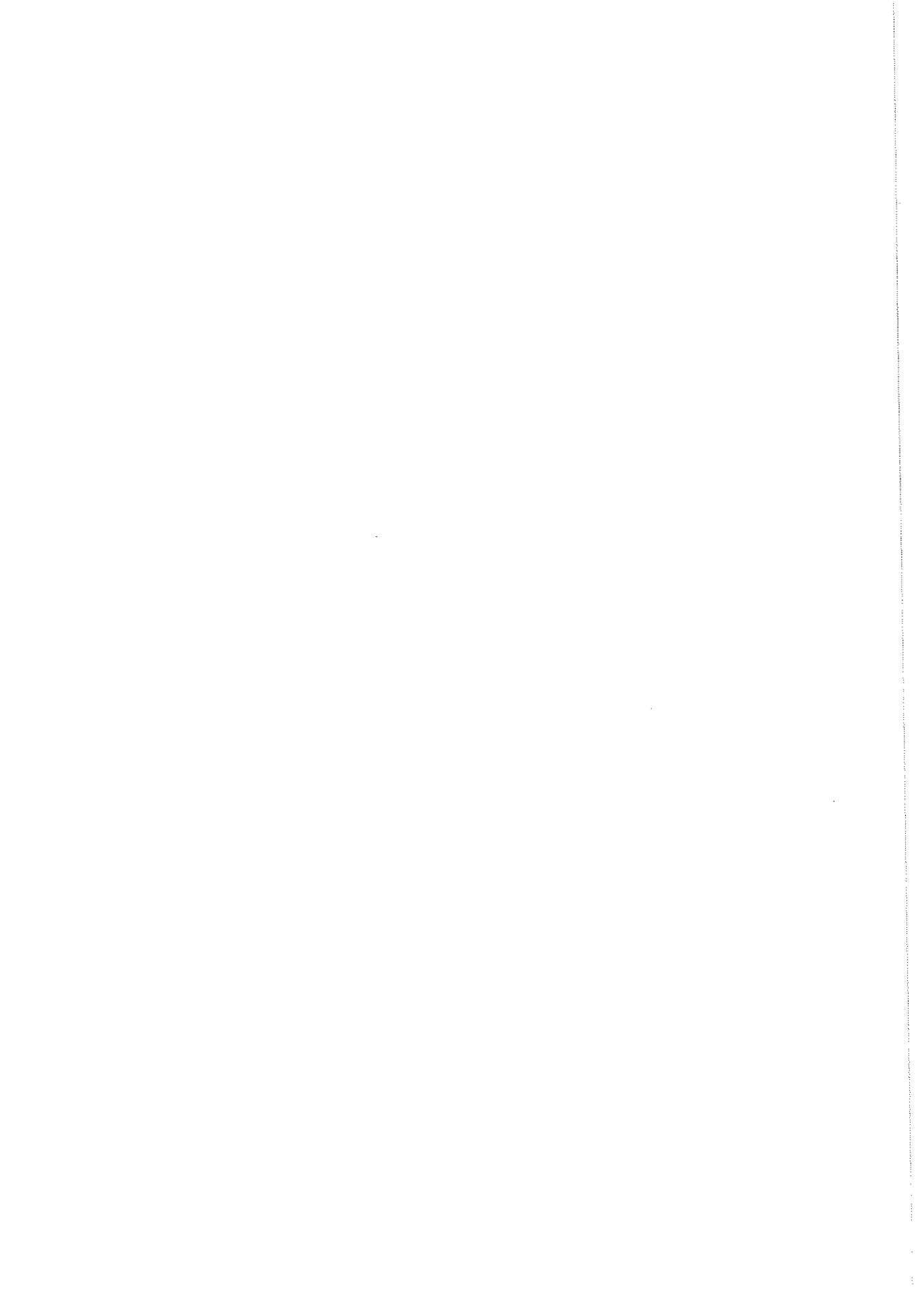
宇都宮の祭りと芸能

発行 宇都宮市教育委員会

編集 宇都宮市教育委員会社会教育課

表紙題字 桜井敬朔

印刷所 イリサワ商事(印刷部)





文化財愛護
シンボルマーク